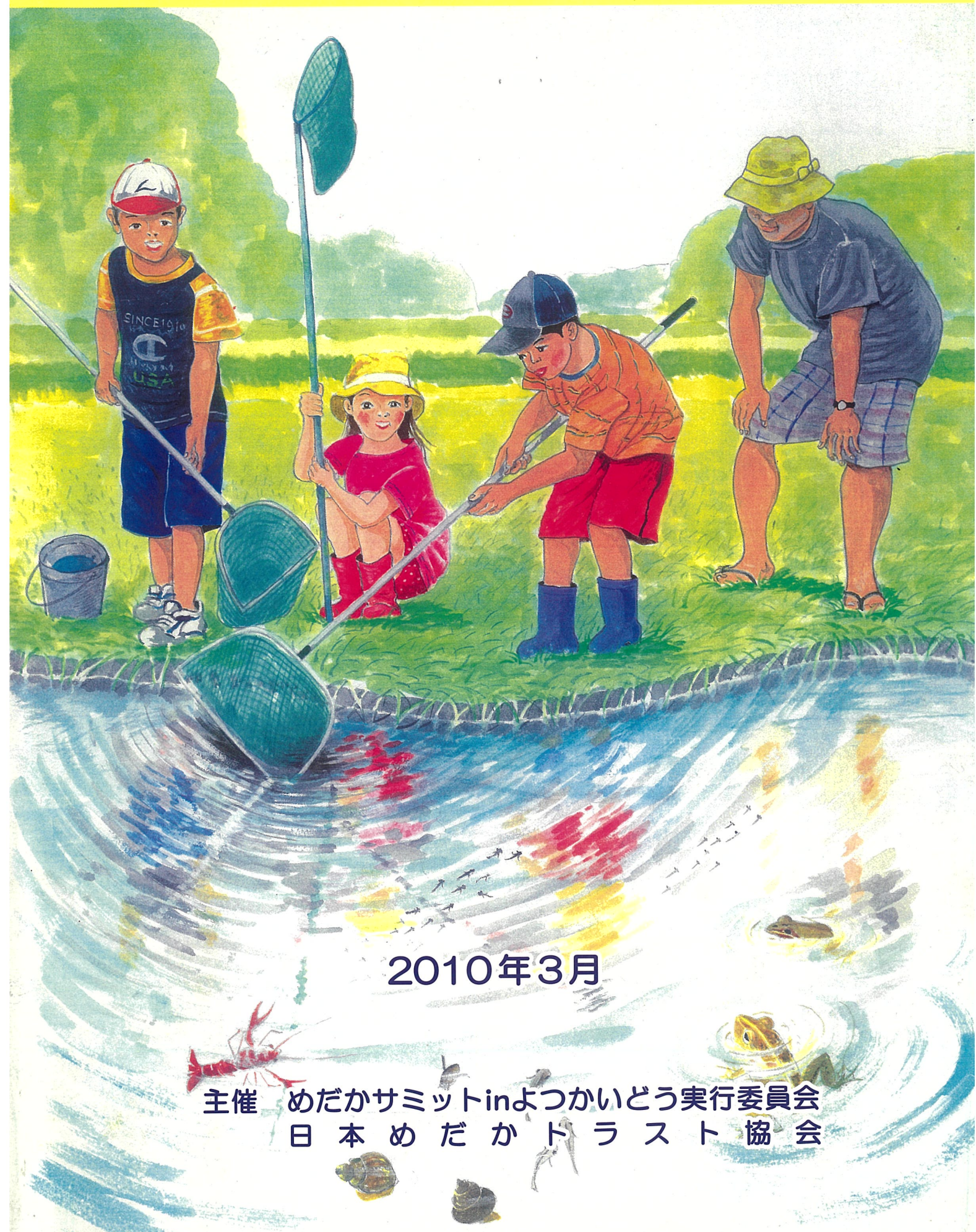


第11回 全国めだかシンポジウム四街道大会 報告書



2010年3月

主催 めだかサミットinよつかいどう実行委員会
日本めだかトラスト協会

めだかサミットは大成功

実行委員長 任 海 正 衛

「めだかサミット、とっても良かったですよ」「ニコルさんの話、おもしろかった」多くの方から聞いた言葉です。何名もの市の職員からも「大盛会だったですね」「たくさんあつまりましたね」と。

講演会の有料の参加者が800名、2日目や子どもおよびボランティアをあわせると約1200名の参加者でした。講演だけでなく、当初心配していた分科会も充実した内容でどの部屋も満員でした。全国から参加した日本めだかトラスト協会の関係者も、この規模と内容に圧倒されていました。

めだかサミットは、四街道市民の力を内外に示しました。四街道自然同好会をはじめたくさんの市民団体が参加しました。市職員の若手有志が四街道駅で宣伝し、当日は「めだか缶バッジ」の実演コーナーをつくるなどは初めて見られた動きです。

自然や子ども関係の団体だけでなく障害者団体の「ピクシーフォレスト」はめだかサミット記念クッキーを売り、「ふるさと四街道の歴史学習会」が史跡を紹介しながらの道案内を、大地の会が綿アメでこどもの広場を盛り上げました。蕎麦打ちの会が四街道産の蕎麦粉で蕎麦を打ち、交流会で振る舞い大好評でした。ブロガーがブログで実況中継までして全国に伝えました。等々、さまざまところに特技を持った市民が参加し、テーマの「自然を生かすまちづくり」に期待しました。四街道の市民力は抜群ですね。民間団体が全国大会を成功させるだけの力を四街道市民は持っていることを示しました。

ニコルさんの講演、とても良かったですね。「日本にきた頃の子どもたちは、動植物の名前をよく知っているのに感心した」「国や行政などに任せるのではなく、自分たちでやろうよ。楽しいよ」「お母さん方をお願いだが、男の子には弓やパチンコ等の飛び道具とナイフを持たせなさい」

嬉しかったのは、何人もの若い人がニコルさんに質問をしたことです。リタイヤ組・高齢者ばかりの会、自然オタクの集まりではなく、多くの市民が自然のある街の良さをともに確認する場になりました。

ニコルさんの講演の後、分科会に参加しないでほとんどの人が帰ってしまうのではないかと心配しました。全国大会にふさわしい専門的な内容や実践も出され、鹿児島や北九州、山形からの参加者も満足する分科会になりました。参加者は各部屋に入りきれないほどの盛況で、300部用意した報告要旨集は売り切れ。「メダカのオスとメスがどのようにして決まるのか」などの研究の最前線の話、自然が子どもの成長にどのように係わるかを実践を含めての考察、街づくりやホテルの保全など、豊かな内容でした。

子どもたちの絵画や子どもの広場、ポスター展示、交流会、ホテル観察会、バスツアーなども多くの方により準備され盛況でした。ピーク時期にもかかわらず少なめだったホテルですが、鹿児島からの参加者も大感激、身近なところに何でもない自然があることのすばらしさを満喫しました。

普通ならば、この紙面を借りて皆様への感謝の意を書くのですが…、「チョット違うのかな」とも思っています。このサミットは実行委員長がみんなに指示して協力を得て行ったのではないからです。関係者1人1人がホストとして主体的に作り上げた大会でした。

「協力に感謝」ではなく「お互いに良く頑張り、良い大会を作ったね。ごくろうさまでした。」とお互いにねぎらいたいと思っています。

ブログ中継をした小坂さんは「四街道メダカサミット番外編 任せ切る事が大切なんだ」で次のように書いています。

http://www.blogmura.com/profile/22849_2.html

「任せてあるから」とイベントを通して何回も聞いた任海委員長の言葉なんですね。開催2ヶ月を切ったの参加しましてふと感じた部分が新規事業の立ち上げ現場の匂いなんです。じっくり基本的な骨組みは作って置きます。その後に大切なのは責任担当能力とトップダウン体制が必要不可欠です。それぞれの責任者に役割を任せ切ります。これが出来ないとき真の結束力は付かない。

そう、関係者ひとりひとりが責任を持って、それぞれの分野で準備をしたのです。みんなの力で作っためだかサミットでした。

《開 会 式》

平成21年8月8日

【司会】皆様、こんにちは。本日はお暑い中、第11回全国めだかシンポジウム 四街道大会にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私は、本日の司会を務めさせていただきます四街道メダカの会の大谷順子と申します。不慣れではございますがどうぞよろしくお願いいたします。

まず、開会の言葉を本大会の実行委員長 任海正衛より申し上げます。

【任海実行委員長】皆様こんにちは。本日は大変蒸し暑い中、大勢お集まりいただきまして誠にありがとうございます。ただ今から、第11回全国めだかシンポジウム「めだかサミットinよつかいどう」を開催したいと思います。私は実行委員長を務めます、NPO法人四街道メダカの会の代表をしております任海正衛といいます。実行委員会を代表して簡単に挨拶をさせていただきたいと思います。

さて、現在の地球規模の環境問題としては、急激な地球の温暖化があり、昨夜もすごい豪雨が来たかと思うんですね。これは地球温暖化とは無関係ではないな、と実感としてわかります。さて、もう一つの地球環境の問題があります。それは何かといいますと、生物多様性の保全ということです。また、持続する社会を作るということが非常に大きな課題となっています。しかし、それはなかなか私たちの目に見ることはできません。じわじわと生物の多様性が

失われているのが今の現実だと思います。

来年、名古屋でCOP10（コップテン）と呼ばれる生物多様性条約第10回締結国会議が開かれます。で実は、千葉県では「生物多様性千葉戦略」というものをですね、都道府県段階でいち早く、千葉県で、堂本さんが専門ということもありまして、県の戦略を作りました。その関係で、めだかトラスト協会の方から、是非千葉県で大会を開きたいという要望があり、この一年間その準備をしてまいりました。

今回のテーマは「自然環境を生かすまちづくり」です。今年1月に行われた、市長さん見えておりますけれど、四街道市民の意識調査によりますと、市民の生活満足度の中で、自然環境に対する満足度というのは71ポイント、ちょっと複雑な計算をするんですけど、71ポイントという値で、他の項目に比べて一番多いのですね。非常に豊かな自然があるということではないかと思います。四街道市はちょうど住宅地と農村地域が混在するその境目に位置するというふうに考えることができる。農業の中で作られた里山自然、それが維持されている。ご存じのように、少なくなりましたが、このシンポジウムのテーマの一つであるメダカ、これも四街道の中では棲息しております。東京から1時間という距離なのですが、夏の夜になりますとホテルが飛び交っている、こんなところは滅多にないのではない

かと、私たちは思っています。また、カワセミもまたサシバも飛んでいる。このような町だと思います。私たちの住んでいるところは、身近になんでもない自然があるということで、非常にすばらしい町なのではないか、と私は思っております。身近になんでもない、このような自然があるということは、まず第一に私たちの生活環境を豊かにしてくれるのではないかと思います。と同時に、子どもたちを豊かな感性で育てていく、子どもたちを育むすばらしい環境であると考えております。

この身近な自然環境を生かす方策をですね、この大会で教育の立場から、科学の立場から、農業や町で生活するという立場から考えていきたいと思っております。四街道市は、里山自然が保全されるというふうに、私はいいましたけれども、一方急激にそれも破壊されている。何よりも農業がですね、高齢化の中で休耕田が増え、耕作放棄地が増えています。また、未だに無意味な自然の破壊が行われています。実は、私は四街道の一番はずれの成山というところに住んで農業をやっておりますが、私の家の三方向が、区画整理という名で山が削られ、今でも山が削られる。そして産廃から作られた処理土という土が大量に持ち込まれている、という現況も一方にあります。

自然環境をどのように考え、どのようなまちづくりをするのか、今日はまず、C.W.ニコルさんの講演を聴いて、その上、分科会における報告とか討論を通して、ともに考えていきたいと思っております。

最後になりましたが、今日の大会に参加された皆さんに、また、この一年間準備に当たってきた市内の自然関係の団体を中心

とする50名以上の実行委員の皆さん、また、市職員の皆様に感謝し、開会の挨拶とさせていただきますと思います。

【司会】続きまして、主催者を代表いたしまして、日本めだかトラスト協会会長で愛知教育大学名誉教授 岩松鷹司様にご挨拶をお願いします。

【岩松鷹司さん】ご紹介にあずかりましためだかトラスト協会の岩松でございます。

本日は、こんなに沢山の、私、今まで10回、先年は山形の天童でありまして、全国、こういう皆様に自然というものをよく理解していただく、そういう一つのチャンスとしてシンポジウムを開催しております。もちろん、メダカというと、たかがメダカというのですけど、メダカを通して、メダカというのは皆さんご存じと思いますが、何処にもいる、すなわち環境をいつでも監視、何処でもいつでも監視できる、そういう生き物として、これはOECDの中でもメダカは、一つの指標動物として全世界活用されるようになっているのが現状であります。

ですからメダカというのは経済的に価値がない、価値がないから、皆が捕って売ることがないので、いつまでも存続できるという、裏返しの利点があります。それも結果的に私たちが自然を見る上に、非常に便利な動物として存在するものですから、私たちがめだかトラストという名前を持っているもの、そのせいでもあります。決してメダカだけを捉えるわけではありません。

ご存じのように自然というのは、全て食うか食われるかの関係であります。一つの網目をなすような、そういうかたまりを私たちは生態とか、あるいは自然とかという

ふうに呼んでいるわけでありまして、メダカ一種類を取り上げても、それには全ての網目上の関わり合いがあるということを念頭に置きますと、メダカがいなくなるということは、それに関係がある生き物がいなくなるということになりますので、そういう意味でメダカを通して自然を見る、これがめだかトラスト協会の目的でありまして、決してメダカだけを大事にするという意味ではございません。

本日、このように沢山の方々が自然に関心を持っておられるというということを私は非常に感激いたしました。今まで10回の中でも、もちろん沢山の方々が参加してくださいましたけれども、ここ四街道でこれだけの方々が集まるということは、市長さんの思いが、多分この会に表れているのだろうと、私はそう思っています。この会を主催された方々、実行委員会の任海さん、事務局の方々が中心になって活躍なさっておりますけれども、市長さん、副市長さんのお力がバックにあるということを、私は感じます。ですから、そういう方々に、今、会を始めるに当たって心からお礼申し上げます。多くの実行委員の方々にも、ありがとうございますとお礼申し上げます。

私たちがこういう活動をする一番大事なのは、現代の日本の地球温暖化という、先ほどの任海さんがおっしゃったような、いろいろな話が非常に大事なことで、私が話したいと思うことを全て話してくださいましたので、私が話すことがなくなってしまいました。私が非常に痛感していますのは、今日のニ科尔さんのお話を私は楽しみにしているのです。すなわち日本の人の心の美しさ、そして日本の風景、日本の自然の美

しさ、これは皆さんが一番よくご存じだと思いますけれども、この美しさを代々受け継いで行かなければなりません。世は代わり、皆さんの姿もやがて消えてしまうでしょう。しかし、自然は残っていきます。日本人の心は残っていく。そういうものを私は非常に大事にしないといけないという思いで、こういう催し物を続けていきたいと思っています。

ですから日本の良さというものを、決してグローバルな形で消してしまわないで、生物でいえば在来種を大事にしていっていただきたい。様々な私たちのレジャーの生き物が外国から入ってきますが、それをいかにうまく日本の在来種と折り合わないような、そういうあれから避けるためにはどうすればいいかというものを、多分、この会で皆さんがいろいろな方々と話し合っ、いい方策を多分編み出されるだろうと、私は期待しております。

今日は、そういう、特にここに集まっておられる方々は、環境に関して非常に関心があり、生物環境に関して関心があり、そして日本のすばらしさをいかに残すかということもお考えになっている方々だと、こう思います。今日は、この地域における唯一のチャンスとして、この暑い夏の中、皆さんお集まりになっているのですが、その暑さよりも、もっともっと皆さんの心を熱くして、議論を戦わせていただきたいと、私は期待して、最初の挨拶のことばに、簡単でございますが換えさせていただきたいと思います。どうか、いい会になりますことをお祈りしております。ありがとうございます。

【司会】 それでは、引き続きまして、本大会

の大会会長で四街道市長の小池正孝様より
ご挨拶をお願いいたします。

【小池市長】皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました市長の小池でございます。今日は、大会会長としてのご挨拶を申し上げる立場でございます。そして、そのご挨拶は皆様のお手元にありますプログラムに載っております。したがって、それをお読みいただきたい、とこのように申し上げて、もう引き下がってもいいんですが、どうもそれだけでは、あまりにも素っ気ない、よそよそしいと、こういうことになろうかと思いますので、少ししゃべらせていただきたいと思います。この文章は非常に短いもので、私はいろいろなことを申し上げたかったですけれども、スペースの関係でかなり圧縮をしております。そこで、そこに盛り込めなかったことをお話ししたいと思います。そして、まず、今日このメダカサミットに関わりを持ってこられる方、ここにご参集いただいた全ての人に心から感謝を申し上げたいという、その思いで胸が一杯でございます。そのことをまず強調させていただきたいと思います。

ところで、本論に入りますが、我々の活動は、その目指すところが達成されれば必要なくなる、そういうものだと思っております。ところが今の現状は、それとはとても及びもつかないといひましようか、全く違った現状であるわけでございますね。そしてこれから先、何十年という年月がかかることだと思うのですけれども、我々の前には大変大きな問題が横たわっております。一つは、水田耕作のやり方、それからもう一つは、先ほど実行委員長の任海さんからありましたけれども、開発という名

前の大規模な土木工事、これによる自然破壊というものが、相変わらず全国各地で進行しております。四街道もその例に漏れないところでございます。そして、この問題を解決するためには、大変大きな困難を乗り越えなければなりませんけれども、今日、このように大勢の方々に集まっていただいた、この場の雰囲気を見まして、私はいかなる困難があろうとも、必ず達成しなくてはならない、そういう決意を新たにいたしました。

メダカが放っておいても元気で生きていられる環境、そういう環境は生物多様性の確保された社会であり、そういう環境であってこそ、人間も安心、安全に生きられる環境である、そんなふうに思います。そして、そういういい環境が創出できたときに、その時には、生物多様性、生物の賑わい、それがいたるところで見られる状況でありまして、四街道の空にも朱鷺やコウノトリが舞い、田んぼで餌をとる姿が見られるというすばらしい光景が見られるのではないかと、私は夢見ております。その夢に向かって、今日、このサミットを契機として、今現在できること、そのことに対して最大限の努力をしたい、そのように決意を新たにしております。

今日は、この会場に臨む前に、決して泣いてはいけない、そんなふうに気をつけておりました。ところが、この大勢の皆さんを前にして、かなりグッときてしまいました。そのために申し上げたいことを滑らかに、十分に申し上げられなかったことが大変心残りでございますが、この気持ちを汲んでいただいて、これからの講演あるいは分科会の活動にご参加いただければ幸いです。

ございます。以上をもちまして、私の大会会長としてのご挨拶を終わらせていただきます。本日はありがとうございました。

【司会】 それでは閉会の挨拶を、大会副会長の千葉県ユネスコ連絡協議会顧問 楠岡巖様お願いいたします。

【楠岡副会長】 皆さん、こんにちは。元気を出しましょう。時間がないということではありますが、少しでも聞いてください。この四街道でメダカ、トンボ、ホタルを増やす大本は千葉県のライオンズクラブのガバナの方針であります里山、そういった関係をどんどん普及していこうということで、千葉県知事が全国に先駆けて里山条例を、千葉県が第1号をやりました。そういつたことで、どんどんどんどん里山を作っていこうということで、我々のクラブも一生懸命にやりました。地元の四街道ライオンズクラブも、それにおいて私が環境保全委員長の際に話を聞きました中村先生も今日お見えであります、中村先生、高橋先生が、博物館の親分が来まして、私の家の屋敷林、350年のこんな杉の木がある屋敷林に続いた水辺、これがすばらしい環境だから是非作ってくださいと、励まされまして、大体三反五畝、3000平米の土地を無償で提供して、税金は私が払います。で始まったのであります。そうしまして、今、小池市長さんさっきお話ししましたが、平成14年の秋、市長さん私の家に来ました。市長ではありませんよ、その時は。でも理事長さんで、「樟岡さん、土地を貸してくれる人を紹介してください。」といったのですね。紹介しなくても、うちのライオンズクラブが作ったトンボ池があるから、そこをまだまだ一杯空いているんで使ってくだ

さい。使わないと、ゴミ捨てられてしょうがないよ、ということから、見にすぐ行きて、もう三週間後には、メダカ池をライオンズクラブで掘って提供いたしました。今現在は、周りの土地の人が、荒れているところを草を刈ってくればよいということで、税金はいいからといって、約1万平米の土地がメダカ、トンボ、ホタルが出るいい環境になりました。

私はまだ八十ですが、これから、これから四街道の水辺の環境を良くし、他ではホタルを、東京の方ではですね、持ってきて放して、ホタルを見たい会をやっていますが、この辺は大自然の中で生まれる本当のホタルが、まあホタルに嘘も本当もないですが、ホタルが飛ぶんです。毎日のように10台、15台の車が入れ替われ立ち替わり来て、一生懸命に子どもを喜ばしています。そういったことをする仕事が、私たち八十爺さんの仕事だと思って頑張る、これからも頑張ります。

それから皆さんにお配りしました資料、これもメンバーの仲間さんが好きな絵を描いてくれました。皆さんにお配りしためだかサミットのチラシも、西岡先生が版画で素晴らしいメダカが空を飛んでいる絵を描きました。そんなことで、今回の第11回めだかサミットは、手作りのお金をかけない、といった環境の中でのめだかミットでございます。

四街道市栗山といいますと、昭和46年にできた四街道インターチェンジのすぐ近くが栗山であります、どうぞひとつ明日の午後まで、今日分科会もありますけれども、皆さんとともども勉強して、いい環境を子どもたちに残してあげたい、と願う一人で

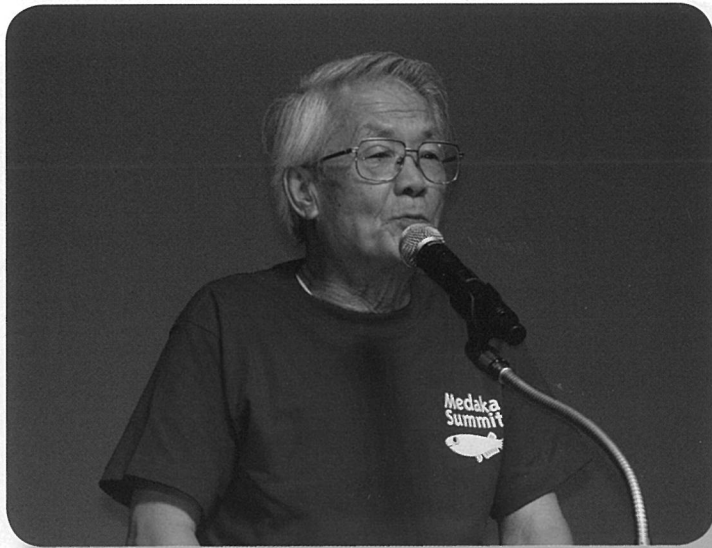
あります。

本日は鹿児島の方から、おじさん、おばあさん、それからお孫さんで東京まで出てきて、それで参加した方が、もう11時ころには見えました。先ほど名古屋の人とも、大阪の人とも会いました。そんなことで、

全国から沢山の来賓というのか、会員の皆様がお見えいただきまして、ありがとうございました。閉会といたします。

(以上)

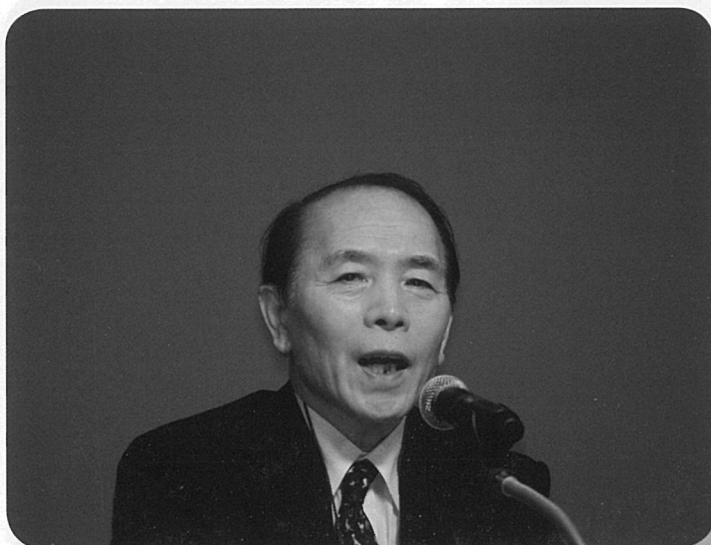




大会会長 四街道市長 小池 正孝氏



大会委員長 任海 正衛氏



日本めだかトラスト協会長 岩松 鷹司氏



司会 大谷 順子氏



大会副会長 楠岡 巖氏



C.W.ニコル氏 《記念講演》

「人と自然との共生」

平成21年8月8日

黒姫の「赤鬼」です。(笑い)

私、「赤鬼」という渾名がね、エチオピアの山の中でついていたのですよ。僕は27歳から30歳まで、エチオピアの森林公園の一番最初の公園長を務めました。私の家は車が入る道から40キロにわたって離れていますね。多少、早くやればね10日間かかった。密猟者と山賊がウロチョロしている。大変なところだったのですよ。

ある場所は、深い谷間にね、白人を見たことのない部族がいました。カワシという、黒いユダヤ人といわれてね。僕はもう1年くらいエチオピアに住み着いて、ずっと国立公園の課長をしてたけど、この谷間にはなかなか入れないし、この人たちはとても厳しい人たちで、密漁なんかしないです。そして山賊もいなかったから、あまり行く必要なかったけど、まあ、挨拶に行こうと思ってね、5日間かけて谷間の中に入って、もう、子どもたちはみんな逃げた。制服を持っているレンジャー、キャプテンいたからね。レンジャーも付いているから、武器をポイと脱いでね、それを見せようと。入ったらね、年寄りが来て「ヤアー」と。まあエチオピアの言葉で「怪人」と言ったんですね。「怪人」。それでね、僕はなんでエチオピアの山の奥まで入って「怪人」と言われなくちゃいけないんだ。そうじゃ

なくて、「カイ」は「赤い」という意味です。「ジン」は「鬼」。「赤鬼」という名前は、その時代、若いときから付いちゃったんです。確かに「赤鬼」です。(笑い)

僕は日本に来たのはね22歳でした。昭和37年、初めて来たとき、ちょうど3回目の北極探検の後。一番最初の探検は8ヶ月、あれ17歳だったですね。それから18でまた探検に行って、あの、8ヶ月。それから20歳の時、また今度は長い、19ヶ月。探検が終わったら、もう22歳で、ずっと北極にいたと思ったのです。北極地方で自分のそり犬を育て、そしてかわいいイヌイットの女性と結婚して、狩りをしながらいろんな探検家の手伝いをやりたと思ったんですよ。でも、僕は少数民族ですよ。ケルト系ですね。今、ケルト系日本人だから、ほんと少数民族ですよ。(笑い)

僕はウェールズ生まれですよ。隣の敵国、あつ、言っちゃいけませんね(笑い)、イングランドの学校行ったからね、すごくいじめられた。だから若いときから格闘技に入ったんです。14から柔道やって、それで僕はずっと探検家でいると思ったけど、一回くらい講道館の畳の上で乱取りをやりたと思ったんですね。それから幻の空手も習いたい。だから22の時初めて日本に来たんです。

その時は、東京にいましたけどね、私は東

京に3日、4日いるとね、ジンマシンが出ます。ロンドンだったら、3日、2日でジンマシンが出る。あの、パリ、ニューヨークは行く前から出る。(笑い) 都会がダメなの。ダメですよ。都会の騒音とか、いろんなものでおかしくなります。その若いときも17からね22までは、ほとんど大自然にいたから、ひどかったんですよ。それがわかってくれた空手の先生がいて、空手の本部道場に來た若い学生たちに、「こいつを山に連れて行け」。だから、僕は47年前から日本の雪山歩いています。黒帯になるまでは2年半かかったのですが、休みがあれば、私は田舎に行って、小さな島で追い込み漁に参加したり、式根島とか、伊豆七島とか、それから山に行ったりしました。あのときは深く関心があったんですね。だって日本は英国と同じように、そんなに大きくない島国ですね。古い文化だって、私が生まれた島国よりも人口は倍近い。なのに熊がいる。(笑い) だって、英国から熊が絶滅したのは970年前です。最後の野生の熊。それからイノシシを食べた。ね、感動しましたよ。イノシシが英国で絶滅したのは、400年以上前。今復活していますけど。日本の自然があまりにも豊かで、多様性も素晴らしい。それから、今若い人が、日本は緑いいんですかと聞くんですよ。僕はいつも言うんです。北に流水があって、南に珊瑚礁がある国は他にはないでしょう。それからアジアの中でずっと独立、いろいろこれ議論はありますが、植民地にはならなかった国ですね。又は言論の自由がある。宗教の自由もありますね。宗教の自由だけでなく、宗教からの自由もありますね。僕が信じているゴッドは、皆さんと無関係。そうじゃない国は、ものすごく多いよ。増えてますよ、ね。それから旅の自由

があって、その上に、山の中にエチオピアと違って、山賊いないの。(笑い) 山賊はみんな田中角栄と一緒に国会議事堂へ行っちゃったからね。(笑い。拍手)

僕は22歳から最初日本に来て、日本の田舎の文化に関心があって、何回も何回も帰ってきたのです。エチオピアの後も日本に帰って、また勉強して、心の傷、顔の傷の癒しは、日本の道場と日本の自然にありましたから。僕はリセットできたんですね。38からあの当時はカナダ政府の環境省に勤めましたが、それを辞めて日本に戻って、和歌山県の太地に1年住んで、捕鯨を小説の取材のためにね。その後は南氷洋に行って、南極で、南氷洋で日本の鯨捕りの姿を見て、日本の男たちを尊敬して、変なやつもいるけどね。(笑い) ほんと尊敬して、40になってやっぱり僕は日本のことをずっと好きで、日本に住みたい。ただし、どこに住むかという問題です。だってね沖縄はね、いいですよ。僕はゴーヤチャンプルも大好きだしね、泡盛も大好きで、音楽も好き、踊りも好き、空手の本場でもある。それから北海道、アイヌの友達も沢山いる。いい自然もあるね。それから九州の人たち、男たちと、どうも相性が合うんですよ。まあ、東北もいいなあー。言葉は英語に近い。(笑い) すいませんね。

その話をして、谷川雁という詩人が、私の昔からの友人は黒姫に住んでました。で、雁さんに会いに行ったんですね。南氷洋から帰って、どこに住むかと。雁さんは、だんだんと機嫌が悪くなっていくんですね。「何で黒姫に住めばいいじゃないか。」ブルドッグがスズメバチを噛んでるような顔で、僕を睨んでる。「でも、俺は海が恋しくなるからなあ。」と言ったら、「ばかやろ、日本は島国

だ。海はどこでも、ちょっと行けばあるわ。」
「そうだよなあ。」それで、僕、素直でしょう。
もう30年になりますよ黒姫に住んで。

どうして森をやり出したかと。僕はエチオピアで自分の血も、人の血も流して国立公園と自然を守りました。カナダでずっと調査。調査の結果でいろいろな自然が保護されるのだと信じてました。それから環境省に入って、法律で自然を守ろうとした。

ずっと自然の保護、心にありましたよ。でも、一人の力ではどうしようもないという、だんだんとね、40になって黒姫に住みついたときに、「えー、日本はどうして、なんだこの国は」と思ったんですよ。最後の原生林をばさばさ伐って、それを反対といったらね、今度はもう、村八分じゃなくて村十一分くらいになったんですよ。

それからマスコミにね、森のこと言ったり、川のこと言ったりすると、知床から屋久島まで、西表、いろんなところから、我々の自然は破壊されるから、ニ科尔さん見に来てくれ。あちこち行ったんですよ。バブルの始まりね。僕は悩んで悩んで。あるときは、あの、山を知りたかったら、鉄砲を持っている漁師と一緒に山を歩く方法が一番いいと、私は思ってます。海を知りたかったら、魚や鯨を捕る漁師と一緒にいった方がいいと思ってます。もちろんいろいろな大学の先生、尊敬してるよ。でも漁師は、僕が欲しい知識を持っているからね。だから僕は猟友会にも入ったんです。

ちょうど1981年、春、大雪の後で、猟友会の仲間と一緒に、黒姫から20分くらい車に乗って、車を降りて山に上がりました。四月の終わりです。雪はものすごくあったんですよ。でも、朝行くと雪が固まって、カンジキはかなくても歩けたんですよ。霊仙寺山と飯

縄山に上がったんです。数時間の間に、野生の熊、4頭見ました。熊の足跡は7頭あったんです。あれだけ熊がいられる場所だからね、当然、原生林です。当然、実のなるミズナラ、クリ、クヌギなどなどの木々がいっぱいあって、当然熊がいる森だから、他の動物も沢山いましたね。タヌキ、テン、キツネ、リス。そしてまだ若葉がまだ出ていないから、小鳥が一杯いるの。シジュウカラ、ヤマガラ、上にはノスリとかオオタカが回ってる。下を見下ろすとね、そこには町がある。列車が走ってる。町には車もある。電気もある近代的な町。小さな町。ここはちょっと右翼っぽいかもしれないけど、神々の世界だな。私は感動して、「僕はここに住みついて良かった。これから他の外人には書けないものを俺は書いてみせる。」と思ったんです。

次の年、同じ山に一人で上がったんです。鉄砲を持たずにカメラ持って、熊の写真を撮りたいと思ったんですね。ダメでした。森はなかったんです。あの素晴らしい森は、全部伐られたんですね。年輪を見たら、400年以上の木々が、もう何百も伐られたんです。文句言いにいったんです、猟友会の会長に。「うん。わかってるよ。これで熊の住処がなくなったな。下りてくるよ。」

そして次の春から、13頭の熊が我々の小さな町で、檻で捕られ、射殺されたんです。子熊までね。深くショックを受けた。友達は沢山できました。実は、私の愛しい人たちは、ほとんど日本人です。その仲間とその話をした。もう、どうしていいかわからない。ちょうど、私の生まれた国から手紙が来ました。ウェールズ政府から。ウェールズのアフアン・アルゴード。アフアンは風が通るところ。アルゴートは森です。そこで新しい森

を作っている。その森の中で、決まった場所で日本の木々を植えたい。いろいろ日本の企業がウェールズを助けてくれるから、ウェールズと日本の関係はすごくいいんです。多分、英国のあの島国の中で、ウェールズと日本が一番仲がいいかな。それで、ウェールズ政府が日本の木々で何が、ウェールズで育てるか。私は理解に苦しんだ。子どもの思い出もあったんです。アフアン・アルゴード。森の谷間という意味だな。風が通るところは谷間という意味で。あれは、僕は子どもの時はね。英国の産業革命以来、石炭産業でね荒らされて、森なんかない。ボタ山ですね。川も死んでるしね。ここで森は作れるわけない、と思った。それで私も45になってね、国へ帰ったんです。その場所に行きました。美しい緑になった。川も生き返った。ボタ山の上でも、森を作ったんですね。

森が回復したら、湧き水も回復して、川も回復して、人々も戻ったんです。

その話を聞いた。どうしたの。僕は、まだ若い自分、まだ戦争の影でね、南ウェールズから隣の国へ移されたんです。母でも。でもこういう話はね、やはり戦場から、1947年、戦争終わって、たった2年、3人の若い学校の先生が国へ帰った。これから子どもたちに何を教えるべきか。まず、正しい国への愛情。大英帝国万歳じゃなくて。この足下にある、この国の歴史。この国の苦労。この国の自然。この国の言葉。それを愛するように。それから未来を信じるように。それから人と助け合って、一緒に夢を追いかける。じゃ、どうやってそれを子どもに教えるか。やはり荒地地ですから、もうダメになった土地を10ヘクタール政府から借りて、オンボロ小屋を作って、道具を借りたり、そして子どもたち

に、「バケツ一杯の土持ってこい。」いろんなところから、子どもたちは、かっぱらったらしいです。庭に行った子どももいれば、墓場に行っにかっぱらった子どももいる。公園にも行った。とにかく、命令で土持って、苗木を植えたんです。10ヘクタールなんです。今その場所は、国立公園になってます。3万ヘクタールです。川のカワウソまで戻ったんです。

私は20数年前にそれ見てね、決めました。もう日本人に愚痴言うの疲れるね。お母さんたち、疲れるね。同じこと、愚痴の繰り返し言うとな、本当に嫌になる。それから、出来ることは出来る、出来ないことは出来ない。じゃ、僕は何が出来るか。ちょうどその時は、うるさい外人だったから、いまは「内人」だからね。(笑い) この国は愛らしく、下手な日本語で愚痴を言うとテレビ出してくれるよ。他の国だと、おまえ帰れと言うんですよね。それでテレビに出て、僕はウィスキーを本当においしそうに飲む。だから、ニッカウィスキーの宣伝。ウィスキーを飲んで、金ももらった。(笑い) それから、日本ハムね。丸大じゃないよ。(笑い) 日本ハムね。おいしそうに食べたんですよ。あれは、昔からのケルト人の保存食だからね。ハムを食べてお金をもらった。それから元タイギリス製のホーキング。靴ね。山歩くと金もらった。ブーツももらったんだよね。金を儲けたんです。じゃあ、他の外人タレントと同じこと絶対にやりたくなかった。この金は日本で使う。日本で儲けたお金は日本で使う。僕、大きな家はいらない。一日ウィスキー1本あれば十分です。(笑い) ちょっと大げさだけど。二日ですね。それから、ロールスロイス欲しくない。銀座で遊びたくない。自分でヨット買おうと思わ

ない。僕は国立公園を作った、エチオピアで。でも、あの国立公園は戦場になったんです。私の部下、半分以上殺されたんですね。家族も。

愛する日本に、何が出来るか。じゃあ、荒れた土地を買って、捨てられた、放置された、藪になってしまった土地を買って、健康的な森を作ろうかと。それにも全部お金をかけました。そして、国籍を取れてからね、財団が作れましたからね、その土地を財団に寄付した。僕が死んでからでも、その森は残るように。

I'm a very happy guy.

一番小さい娘がね。あの土地を財団に寄付したときにね、娘がまだ小さかったんですよ。泣きましたね。「ダディ。私たちは貧乏になるの」(笑い)

「うん。貧乏になるよ。なりました。」でも、ほんとの財産は土地でもないですね。ほんとの財産は、目に見えないものですよ。健康、友情、愛情、信用。私は、この国に外人で出来たんです。でも、僕は今、国籍までいただきました。皆さんの前で、僕の下手な日本語聴いてくれるんですね。こんな幸せなことはないですよ。

それから森をちょっと一緒に見ませんか。お兄さん、お願いできますか。ちょっと映像があるんです。

この買った土地はね、土地の名前はあったけどね。あまり美しい名前ではなかったんですね。幽霊森とか(笑い)、赤谷地とかね。「何で、こんなところ買うの。」と言われましたけど。

(なかなか映像が出ないので) 今、行きの夜の景色です。(笑い)

ウェールズ行って、荒れたところを美しい

森に回復したことで、「アフアン」という名前を付けちゃったんですね。

お兄さん、頑張ってね。私、こういう機械は使えないんですよ。

大きくなって、色が出来ました。

これ、アナグマですね。巣箱に、ムササビが入っている。

絶滅危惧種は、全部で23種類は戻りました。

生きてる森は、とにかく楽しい。退屈しない。だから、僕はこの森にいと外人ではないんです。森の住人です。

キノコもいっぱい採れた。これは、私の一番好きなキノコですね。タマゴダケ。とってもおいしいです。間違ったら大変。これはアミカサダケでしたっけ。あれもとってもおいしい。これは、光合成しない、花が咲く。これも蘭の一種。

もう、とにかく僕ら毎日、これ何、何。もう一つ憶えたら、また、新しいものがある。百歳まで生きて、まだまだ憶えることいっぱいあります。訳のわからない、楽しい形の生き物がいっぱい出てくるんです。

この蛾は、ちょうど六月の真ん中にね、沢山昼間にナラの木にチョウチョのように飛ぶんですよ。美しいです。面白い形のものいっぱいいるでしょう。

ねえ。臭いだけじゃなくて、美しい。

我々のところで、蜂が???する。哲学者でしょう。こんな、かわいいじゃない。(笑い) ネズミを沢山食べて欲しい。

上の貧弱なところは国有林だから。(笑い)

全然手入れしないね。

まあ、千葉の森は、また違うんですよ。九州の森も違う。北海道の森も違う。ウェールズの森も違うけど、哲学は一緒だと思います。特に、この国、この日本は生物の多様性は、ヨーロッパの国より遙かに多いと思うね。多様性があれば、可能性がある、私は信じている。いろんな波があります。森から恵みをいただく文化は、日本は古くからある。シイタケとかナメコ、あつ、熊、足短いね。イナイイナイベア。(笑い)

熊も良く来るようになったんですね。

これを見て。きれいでしょう。熊のウンチ。(笑い) これ、トウモロコシ入ってないです。山のものしか入ってない。糞の中にね。だから、森が回復すると農民も助かります。

これ、松木さんの地元の森なんです。松木さんがいなければ、この仕事は僕は出来なかったですね。

キツネ。さっきのキツネは、ウサギ追いかけていたんですね。

あと、テンとか百年前くらいとかから入ったハクビシンもいます。リス、ヤマネ、タヌキ。最近カモシカも、これもヤマネ。かわいいでしょう。カモシカも入ったんですよ。もう、そろそろ来るでしょうな。

場所によって、この場所は、戦争の時にいろいろ荒らされたんですよ。赤い土を取って鉄を作ろうとしたから、地面の中の水の流れがおかしくなったんです。それで、やり直しました。480メートルの小川を作ったんです。こんな、小さな小川を作ったんです。それ、地面の水集めて、酸素を混ぜながら、植物で浄化して、きれいな水を川に還すことにしました。

3年で23種類のヤゴが入ったんです。トンボの子どもね。それからカエルも4種類増えましたね。かわいいでしょう。だいたい世界中でカエルが減ってますけど、僕らのところでは減ってません。大丈夫です。まだ今のところは。

やはり人間が自然を荒らすことも出来るし、荒らした後を放置すると、回復はするかもしれない。元々の自然にはなれない。やはり、本旨は保護じゃないな、と私は信じています。人間に合わしたところは、人間の汗と知恵と愛情が必要です。それと、この国は特にね、自然が応えてくるんです。その間はね、いろいろな恵みが採れる。いろいろな友達も作れる。人が良く歩くところに、間引いた枝をチップにしてね、それを敷きます。すると歩きやすいだけではなくて、その道を使わなくなったら自然に戻るんです。ナメコ、シイタケ、ヒラタケは作ってるし、炭も焼いてますし、去年はやっと、樽のための材木も植えた。やっと30ヘクタールになりました。僕が生きている間に50ヘクタールまでいきたいなあ、と思っています。

大木が出来るまでは、エサ台を作ってますね。鳥たちとかコウモリのために。ずっと調査をやって教育の場所にもなってます。

世界で初めて姉妹森になったのは、我々の森とウェールズのアフアン・アルゴードです。姉妹森になったときですね。大使と向こうの公園と。これ、ウェールズにある森の中にある小さな森で日本の木々を植えたんです。それでウェールズにいる日本人がここに集まって、ウェールズの子どもと交流があるんですね。

さっきの小林一茶の俳句でした。

でも、僕が子どもの時、ああいう景色だったんですよ。炭坑で、こういう黒い感じだったんですよ。でも、こうなっちゃった。緑が回復したら、人間も戻ったんですね。昔、ビクトリア時代に作った橋は、もう鉄道はないけど、それを保存して散歩道になっている。この川にはサケ、イワナが産卵している。それで、姉妹森になっているから、向こうの子どもたちが黒姫のことを勉強しています。人間の交流がある。

二つの国の旗、赤い龍と日の丸。嬉しかったですね。やっぱり、森、自然はこういう場所にもなるんですよ。

それで、チャールズ皇太子は日本には三日しかいなかったけど、わざわざ黒姫まで来ました。松木さんも、ひどく緊張したですね。そして我々の学生と話をし高円宮妃殿下と一緒に森の話をしてくれました。とってもお詳しいです。楽しかったんですよ。大勢のSPとか役人が来ましたが、二日あとで、皇太子と歩いた道に、二頭の熊がドッスンとウンコを落としてくれた。(笑い) 礼儀正しくですね。

スライドありがとうございます。この後は、短い授業があります。その前に、僕はちょっとだけ話しますから。

これは、私がちょっと厳しい話をしますね。22歳の時、最初に日本に来たときですけど、日本の田舎あちこち歩いてね、郊外歩いて、子どもたち見て、自然を見て、日記で書きました。「日本は子どもの天国だな。」47年前ですからね、必ずしも豊かなところばかりじゃないです。でも、ほんとの豊かさがあったんですね。子どもたちは川で遊んだり、楽しそうだったんですよ。

でも、この財団を作ったときに、一人の理事から聞いた話はね、もう、虐待を受けている日本の子どもがどんどん増えている、施設に預けられた子どもの7割は、自分の親と一緒にいられないです、いろいろな理由で。今日は子どもたち沢山来てる？

子どもの前で話せないことあるんですよ。これから皆さんにお見せします映像には8歳で性的虐待をずっと受けた子もいる。11歳で親が自殺して、子どもたちに毒を飲ました子もいる。一人の男の子が吐きましたから、生き残った。あの、お腹が傷だらけになっている美女もいる、12歳で。赤ん坊の時に、酔っぱらった母親が、赤ん坊のお腹にタバコ消してた。そういうような話をいっぱい聞くよ。

と、僕は、もういい。森は水のためになるし、生物の多様性が豊になる。いろいろな恵みが採れる。教育の場所になるけど、森は、本当はね、心の癒しの場所だと、私は、わかり始めたんですね。そういう子どもたち、トラウマを受けた子ども、すごく寂しい思いをした子ども、それから目の不自由な子どもたちを、生きてる森に呼べば、閉まった心の窓がちょっと開くんじゃないか。最初は、その話をしたら友人が注意したんですね。おまえの森には熊が出る。蛇もいる。ブヨもいる。スズメバチもいる。怖いんじゃないか。危ないじゃないですか。何かあったら誰が責任を取るか。

私は、本当の武士道を習いに来ました。それから日本国籍いただきました。責任てどういう意味かわかります。友人と家族とマネージャーと相談して、「僕は責任を取ります。」と言ったんですね。

さすが日本、地元の若者、いろんな友人が集まって子どものプログラムを、もう30回や

りましたけれど。この子どもたちの森に来た姿を見てください。お願いします。

(頭からやってよ) (笑い)

僕はこの子どもたちの歴史知っているから、いまでも見ても胸が痛くなるから。その代わりに歌を作りました。カラオケじゃないから安心してください。

Do you know a place? I have your place. A World Magic.

(ニコルさんの歌) (拍手)

私は、本当に未来を信じる。私は、日本を信じます。日本はハイ・エンカウンターしたでしょう。明治維新、それから第二次世界大戦、あと、これから日本人が少しずつ皆さんのようにね、日本の自然を大事にして、小さなメダカからも、トンボからも、住める日本にするとね、この国の可能性は素晴らしいよ。本当に僕は日本が世界一になる。右翼だと言われたら仕方がないな。本当にこの国の可能性が素晴らしい。もう、私はそれを信じる。だから、本当の美しい国を作ろう。

僕はウェールズとの交流が出来てから、ほとんど毎年英国に帰ります。そして、英国に帰るとね、大都会は最低です。本当に治安がいろいろな理由で最低です。あの、昔のニューヨークみたいになっているんですね。でも、田舎は元気だぜ。ほんとに。

例えば、一つのウェールズのボーダー（国境）に、北海にあるウェールズとイングランドのボーダーに1万人の町があるんです。ラドロウ（Ludlow）というところ、1万人です。そこの町は、何もない町。海もない。小さい

川がある。鮭が上がってますけれどもね。そして、小さな丘があって、牧草地があって、林があって、畑がある。なのに、あの町にミシュランの星持っているレストランが3つある。3つですよ。そして、英国政府が保護しろという建物が400以上あるんです。あの町は本当に美しいし、おいしいし、町には小さな屠殺場ある、いろいろな人たちが自分たちでブーちゃんを大事に育ててね、あそこでブタちゃん、さよなら。そして夕方になってソーセージとハムが返ってくる。(笑い) 地元で出来ているんですよ。もう、スーパーも素晴らしいし、文化はやはり地元からやるしかないです。

英国ではね、素晴らしいリーダーがあります。それはチャールズ皇太子。チャールズは有機農業とか自然の回復とか、自然の中で教育、癒しを受けるべきだと。するとね、そういうことに注目いきますと、まず、農薬が減るでしょ。農薬減ると川が生き返る。森が生き返ると、花が咲く。小鳥がいっぱい来る。牧草地の中で、英国の場合はね、子馬が走ってる。英国では馬を使った林業の会社ホースワーゲンが70あるよ。70ありますよ。

ウェールズのアフアンは10ヘクタールで始まって、今3万ヘクタールになっているんですね。そうするとね、地元の人たちのライフスタイルが豊になって、癒しがあって、余裕があるよね、結果として観光（客）が来るんですよ。観光のためにいろいろ考えることを止めましょうよ。地元の人たちが良ければいいの。そうすると余裕ができて楽しい観光が出来る。僕らの小さな森には、のべ2千人来ますよ。子どもたちのプログラムあるし、京都大学のプログラムあるし、たった30ヘクタールの森。もし、各町で自分たちの周りの

メダカたちを大事にするとね、これほどこの国がエデンの園じゃないけど、園になる。私も、いろいろな問題があることは知ってますよ。でも日本は技術がある。心があれば、いい日本を作しましょうよ。僕は来年70歳。僕は、あと10年どうにかウィスキーを一日半分

位にして、10年頑張りますから、皆さんも一緒に頑張りましょう。

本当に美しい日本を作しましょうよ。ありがとうございました。(拍手)

(以上)



C.W. ニコル氏



ニコルさんと任海さん

C.W.ニコル氏 《質疑応答》

平成21年8月8日

【司会】ニコルさんに、こちらで用意した質問をいくつかさせていただきます。その後、会場の皆さんからお願いしたいと思います。

【任海】ニコルさんが「日本を信じる、未来を信じる」と言いましてね、本の中に「僕が日本人になった理由」という本の副題を見ますと、今の日本に初めてやって来たら、僕は日本人になったろうか、と非常に皮肉っぽく書いていらしてね、何かドキッとしました。そこで、先ほど環境の素晴らしさということを書いていただいたのですが、しかし、そういう中でどんどんどんどん自然の破壊が起こりますね。それはどうしてなのかなあとというのは、私、ニコルさんと同じ日本人として、ともに考えていかなくてはいけないと思っているのですけれど、ニコルさんどういうふうにお考えでしょうか。

【ニコル】あのね、ちょっと、すごく尊敬している先輩、ここにいらっしゃると思うのですが、瀬田さん。本当の日本のレンジャーがいるんですけれども、こういうことは瀬田さん聞いたら怒るでしょうけれど、政府は相手にしない方がいいよ。(拍手)

自分たちだけで出来るだけやる。私も確かに落ち込んだときもあったんですよ。あの文章書いたときも。でも、この子どもたちのプログラムやってからね、本当に信じる。ただ、あの、どん底に落ちることね。谷間がなければ、山がないからね。涙がな

ければ、虹が見えないという言葉もあるんですよ。

「Do what we can.」少しでもいいから、ひょっとしたら体が不自由で、お祈りしかできない。それでもいいじゃないですか。とにかく、役人と政治家(笑い)ばかり頼らないように。(拍手)

【任海】私たち四街道メダカの会では、栗山に自分たちで自然公園を作って、皆さんに開放していますけれど、やはり自分たちでやるということを言われてね、非常に心強く思いました。

【ニコル】いい人もいるよ、政治家。(笑い) それは認めるけど役人もいい人がいるけどね。

【司会】それではお尋ねします。先ほど言いました栗山の自然公園ですね、子どもたちがやはり自然が大好きで、近くの小学校の子どもたちが遊びに来ますけれども、ザリガニを捕ったり、メダカを捕ったりするんですけれど、子どもたちが生き生きと遊んでおります。子どもにとって自然と接触する中で成長するということは、とても大切だと思うのですが、そういうことについてお聞きしたいと思います。

【ニコル】僕は子どもたちにいつも話をするんですけれどね、あなたは、特別な生き物だよ。あなたがここにいるということは、奇跡ですよ。ものすごい長い歴史の中で、あなたが生きている。周りにいる友達も、みんな特別だ。このアリさんも素晴ら

しいもんだ。だから、弱いものをいじめないで、自分をいじめないで、いろんなこと見て、協力して一緒に生きよう。

私は、ヒルね。しっかりヒルのことも知ってるよ。ブヨも知ってる。でも、田舎、何が出来る。出来るだけ子どもたちを自然の中で遊べるようにして欲しい。学ぶようにして欲しいです。

(ゲーム機をやる格好をして) ああ、これ、出来るだけやらないでね。みんな。

これやると本当に頭悪くなるし、目も悪くなる。親指だけは立派になります。(笑い)

【任海】 ウェールズやヨーロッパというのは自然が破壊されて、復元してきたという感じで、その中で自然を管理する大切さとか、自然を大事にしなくては どうしようもないんだなあというものが、国民の皆さんに浸透しているのかなあという感じがするので、すね。ところが日本の場合は、自然は自然と放っておくと、それでいいんだと、何か気候としても暖かく温暖で、雨量が多いですから、放っておけば自然が復元するという形で、どうも自然に対する感覚が鈍いのかなあと。いっそのこと破壊させるだけ破壊させた方が、考えるのではないかと、時々そんな気になるのですけれど、どうですかね。

【ニコル】 47年前に僕が初めて来たときは、日本の子供が、ものすごく自然の、例えば、花の名前、虫の名前、昆虫の名前だとか、鳥の名前とか、何が食えるとか、そういうもの、ものすごく詳しい。ヨーロッパの子どもよりも、はるかにいいです。

しかし、最近若い人が、木の名前言えというんですね。この前、木の名前言って、5つ言える人など、少ないですよ、大学生で。だから、ちょっと自然音痴になっている人

が増えていきますね。

それから、放置したらいいじゃないか、と。私の里山の中で、藪になったところ、全部手入れしているんじゃないです。藪を好む動物、鳥もいますけど、ワンパターンでやらないで、全部藪だったら、ヤマガラとかシジュウカラとかコウモリとかフクロウとか、いろいろなタカがいなくなりますよ。そして、もう何百年も待てば、新たな自然ができるかもしれませんが、あらゆる種類が消えてしまう。それは、よくないと思います。

【任海】 もう一つなんですけれど。ここはめだかサミットなんですけれど、実は鯨のことをお聞きしようと思います。実は、昨日わたし、鯨の刺身をとって食べたんですけど、一昨日、南房総の和田で二頭、鯨が上がったんですね。昨日の朝、その解体がありまして、そのお土産として。私本当は行くつもりだったのですけれど、そのほうがニコルさんと話すのに迫力があると思って、そのつもりでいたんですけれど、ちょっと忙しくて行けなかったんです。行った人が、素晴らしいと言うんですね。ちょっとその人の意見を聞きながら、高橋さん、どこですか。立って手を上げて。和田のほうへ行った感想をお願いいたします。

【高橋】 先ほどにニコルさんが黒姫に入る前に、和歌山県の太地にいらっしゃったという話をしましたよね。そこにはたくましい男たちが、誇れるお父さんたちがいたと、実はそれは捕鯨を再開している人たちなんです、ということをお話しされました。実は、私きのう四時に起きてですね、7時に南房総市の和田というところがあるんですね、そこに26頭ツチクジラ、ありまして、

沿岸の捕鯨で解体するということで、そこにいる友人が是非見てくれよということで、行ってきた。本当に、2時間ばかり解体するんですけどね、時間かけて。その解体の技術が見事というかね、若い人もいますよ。本当に、あれ、こういうふうに技術が継承されているんだと、思った。同時に、周りにいろんな人、おばさんたちがいるんですけど、いろんな食べ方が継承されていると、どうも江戸時代から続いているようなんですね。そういうおいしい料理があることを、実は初めて知ったんですよ。それで感動いたしましたですね。逆に思ったのは、日本で捕鯨をすると世界からバッシングにあうと。何か、あのすごい人が来て、バッシングするんですね。我々も乱獲に加担しているのかと思って、鯨を食べることをためらっていたんですけどね。昨日行ってみた限りはですね、これはすごい鯨文化が日本にはあると。これを何とかバッシングに遭わないようにですね。日本の中で鯨文化を育てる、これは誇れることがちゃんとあるんだということを知りましてね、先ほど話を聞いて非常に意を強くして、そして、任海さんが刺身を食べておいしかったということを言ってくれたんで、つい立ってしまいました。そんなことで、バッシングがある中で、鯨というものを食べるということはどういうことなのかということをお聞きしたいと思います。

【ニコル】僕らが北極で調査したものは主に、アザラシ、セイウチ、白いイルカ、海の哺乳動物ですね。それからカナダの西海岸にも、東海岸に、私は日本の捕鯨船に乗った。沿岸捕鯨はカナダでやってましたね。日本の鯨捕りが来て。僕は昔から、海の哺乳動

物を捕って食べる文化を尊敬して、弁護しました。ただ、このバッシングは続きますよ。特にこれはね、敵を作ったって仕方ないの。僕は、I'm Japanese. (日本人)。誇りに思ってます。南氷洋の捕鯨は、いくら正しいと言ってもね、オーストラリアとかニュージーランドとか、アメリカがね、次々邪魔しますよ。もう、大変。だから、私が、これニコルの個人の経験と心からね、捕鯨を守るべきだと思います。でも、一番やりやすい方法は、日本の政府は同じ考えは持ってないだろうけど、沿岸捕鯨だと思います。伝統的な捕鯨の地域がある。和田はその一つ。太地、それから網走ね。そういうところで、ちゃんと調査の上で、枠を決めて、あの一、ズルしないで、ちゃんとやればね、外国の友達、理解者が増えると思います。ただ、今の世界の感情でね、例えば、2年前にザトウクジラを何十頭、南氷洋で捕ると言ったら、私は読めたんですよ。もう、これで大騒ぎになりますが。ザトウクジラはホエールウォッチング・ダミーですよ。だから、空気が読めないですよ。(笑い)

だから、ここを止めて欲しい。沿岸捕鯨続くべきだと思う。でも、それはね地域で決めて、国際的には納得できるような、きれいな捕鯨やって欲しいです。また、感情論になりますけれど、あの一、イルカの追い込み漁は、私もずっと前から見て、イルカの殺し方はとっても残酷だったんです、太地で見たこと。あの、フェアウェル諸島も追い込み漁やってますけどね、追い込んだゴンドウクジラを一発で刺して殺しているんです。でも、僕は太地で見たのはね、槍で刺して、傷を負ったイルカが45分かけて死んでるんですよ。こういうことは、あ

の一、許せないです。だからイルカの問題も、捕鯨の問題もね、ほんとにね日本の元々のモラルでやりましょうよ。で、日本人で決めましょう。それは、私の感情。それでね、刺身はおいしいな。(笑い) あの、ハリハリ鍋もおいしいな。僕は、毎日クジラは食べようと思わないです。毎日食べたことありますけれどね。でも、年に一回くらいは食べたいな。それは、私個人の、69年の間のいろいろと見て、やってますね。(英語で)???

ちょっと長くなってごめんなさい。こと捕鯨になると、僕ね、もう3時間もしゃべる。(笑い)

【司会】 それでは、せっかくの機会ですから、会場のどなたかから何かニコルさんに聞いてみたいという方いらっしゃいましたら、是非どうぞ。

【来場者】 2点お伺いしたいのですが、ニコルさんの座右の銘というか、好きな言葉、自分がつらくなったときに、この言葉を思い出すとがんばれるなというのがあれば、教えてください。もう1点ですが、僕は今教師を目指して一生懸命勉強しているのですが、学習指導要領で子どもたちに生きる力を身に付けさせるというのがあるのです。そのなかで、新人プロジェクトなどで子どもの心を突き放された子どもをもう一度立ち上がらせるというのは、子どもたちに生きる力を与えるというのは、すごく深く感じました。で、そういう小学生でも中学生でもいいんですが、これだけはやっておいた方がいいな、教育界でやってもらいたいというのがあれば、それを是非教えてください。以上です。

【ニコル】 初めて日本に来て、いい言葉だなと思ったのは、「いただきます」(笑い)。

ほんとにいい言葉ですね。外国には似ているような言葉はあるけれど、だいたい神様に感謝するとか。でも「いただきます」は、ものすごく世界が入りますね。それから、あの「もったいない」。あれも大好きです。それから、子どもたちに何を教えるべきかと。「生きる」ということはどれほど重要かと。それは他の小さな生き物でも、大きな生き物も見えて教えられるんじゃないかなあ。それでね、お母さんみんな怒るけど、先生方もみんな怒るけど、「男にはね、飛び道具」だよ。ね、パチンコとか、弓とか、そういうものを教えるべきだ。それから、刃物の正しい使い方とかね。そういうものを教えるべきだと。やっちゃいけない、やっちゃいけない、やっちゃいけないとなったらね、いずれやっちゃうんですよ。(笑い) 飛び道具。(笑い)

機関銃じゃないよ。(笑い)

【司会】他にどなたかいらっしゃいますでしょうか。日本では、「いただきます」というのは命をいただきますという意味を込めております。

【ニコル】 そうですね。

【栗山さん】 はじめまして栗山と申します。ちょっと違うかもしれないんですけども、私今30代なんですけれども、今ニコルさんがいろいろお話しされた内容なんですけれども、長い目を見た話をされていると、このめだかサミットも長いスパン、10年、20年、そういう長い話だと思うんですけども、私たち30代の人間というのはどうしても短いスパンで考えてしまう。例えば、明日のお金という話になってしまう、すごく短い話をしてしまうんですけども、その中で、例えば10年先だとか、20年先だとか、そうい

う活動に何とか30代の人間を誘いたいというのがあるんですけども、なかなか誘えない。そんな面倒くさいことはしたくないという話が出てしまうんですね。それで、まずはそういう30代を長い活動に参加させたいと思うんですけども、何かいい知恵はないでしょうか。

【ニコル】あのね、やりたくないやつに、一生懸命、やれ、やれ、やれと言っても無理です。(笑い) それよりも、いい仲間を作って、2、3人で作って、楽しそうにやってたらね、いろんな人がついてくるよ。

【栗山さん】まずはやってみよう。

【ニコル】やってみて。うん。やってみて。それで、楽しくなると、ついてきますよ。簡単ですけど。(笑い。拍手)

【岡崎さん】四街道市在住で、岡崎と申しますけれど、先ほどニコルさんが、男の子には、男性には飛び道具、子どもの頃から使い方を教えるのが一番だとおっしゃってましたが、私はシングルマザーなんですけど、今娘がおりまして、今小学校5年生なんです。女の子には何を教えたらいいでしょうか。(笑い。拍手)

【ニコル】諸君。助けて。(笑い)

【岡崎さん】今、娘は、シングルで一人っ子なものですから、私をからかって、とっくみあいをするような相手はいないですよ、で、私をからかって遊んでるんですけど、それでは私は大人なので、とにかく今も、私を突いて、こういうところで私がいやがったら、声を上げたら、私が困るだろうと、さっきからずっとやっているんですね。もちろんさっきの映像はしっかりと見てまして、連れてきて良かったなと思っているんですけども、まあ、今のうちに、男の子

が子どもの頃から飛び道具なら、女の子には本当に何を教えたらいいのか、是非、ご教授願いたいのと、めだかサミットについて、あのメダカについて???教えてあげていただけたらいいなど、ニコルさんのお考えをメダカとそれについて。

【ニコル】実は、私は娘は、3人いるんですよ。それで孫は5人で、その4人は女の子ですね。僕は、女性だけじゃないと思うけど、美しいもの、かわいいものが、女性の心すぐ行きますよね。女性の中で飛び道具、大好きな人もいるけど。私の上の娘は、空手2段でね、射撃もうまいし、僕よりも喧嘩っ早いんですけどもね。でも、彼女は美しいものがあると目と心が、ちょっといくんです。それで日本だけじゃないけど、(ささやき声で) 男よりも女性の方が強いからね。(笑い)

男の扱い方上手に出来るお母さん、教えてください。(笑い。拍手)

男からね女性に、ちょっと秘密教える。男は単純だから、たまに誉めてやって。そうするとやる気になります。(笑い。拍手)

【任海】メダカの会で月に一回、子ども自然科学教室というのを今年から始めたんですよ、小学生の上級生の男の子、女の子が来て、水の中に入って網で魚を捕って、どんなのが入るか調べる。これは男の子も女の子もないですね。ジャボジャボやってる。本当に楽しんでますね。あまり、男、女という関係は特に今の子たちはないんじゃないかなと思うんですけども。

【ニコル】僕は古いタイプだから。(笑い) 11歳から女性がいらない世界に入れられたんです。

女性が怖いんだよ。(笑い)

早く、逃げたいな。(笑い)

【太田さん】私、佐倉から来た太田ですけれども、ニコルさんが日本に来られた頃には非常に自然が豊かで、子どもたちが自然と戯れていた。ところが、今現在は、その戯れる自然がなくなってしまったと、それが今、里山ということで、里山をどうしようかなあというふうになってきたと思うんですけどね。それじゃ、なぜ日本はそうふうになったかと、それはやはり私は、私自身が印旛沼をきれいにするという中で悩んでいることは、要するに農業がですね、もう疲弊しちゃってると、昔から先ほどのニコルさんのお話の中には、自然というのはただ放置しているだけではなくて、やはり守っていかななくてはならない。で、昔は、ニコルさんが見えられたときには、農家、農村集落が守っていたんですよね。そこで守る社会がなくなってしまった。このへんが一番ですね、農業が疲弊して、65歳以上の農業従事者が60パーセントになってしまった。放棄水田、放棄山林ですね、そういったことに対して私たちどうしたらいいのかということが、ニコルさんとして、この問題についてどういうふうに考えられているのか、その辺、非常に難しい質問だと思いますけどね、日本の農業、それはいかに自然を守っていくかということと、私は同根ではないかと思っているのですが、ちょっとその辺についてニコルさんのお考えをお聞きしたいと思います。

【ニコル】ありがとうございます、おっしゃるとおりですね。僕は、東京に47年前にいたんですけど、実は東京の真ん中にいられなくて、東村山の空き地にいたんですよ。その時、秋になると里山から落ち葉拾って、堆肥に使ってましたね。日記に書いたんですよ、

日本のファームは、ファームじゃなくてガーデンだった。本当に美しかったんです。今回来る途中で、黒姫の僕の家から車に乗って長野市まで行ったときに、本当に心が温まる風景があったんですよ。多分、じいちゃんとばあちゃんだと思うんですけど、孫二人と畑からジャガイモ掘ってたんですね。子どもたちが小さな手でね、土の中のジャガイモ拾って喜んでました。この国は実はまだ、放置されてるけど畑あるしね、放置されてるけど里山があるから、仲間を増やして、戻すしかないんですね。だって、学校でやれとか、国でやれとなったら、なかなかやれないですよ。

おっしゃるとおりです。本当におっしゃるとおり、自分たちで育てた野菜がどんなにいいかと、採ったときも、料理するときもどんなにいいかと、その人間らしいことに戻したいよな。ね。

【司会】どうもありがとうございます。まだまだお聞きしたいこと、たくさんありますけれども、残念ながらそろそろ終了時刻となりました。

それでは、ここでニコルさん私たち実行委員会からささやかなプレゼントがございます。ウイスキーではないのですが、北海道産の日本酒を用意してありますので、どうぞお受け取りください。(笑い。拍手) どうもありがとうございました。ニコルさんに、もう一度盛大な拍手をお願いいたします。

(以上)



会場の文化会館



販売スタッフ



ポスター展示



バッチ実演



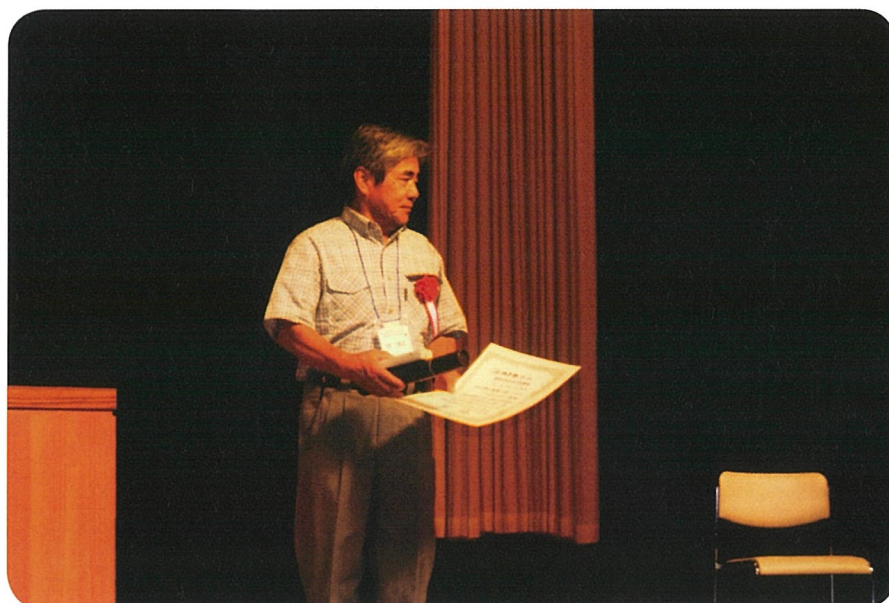
ピクシーフォレストの販売



こどもの広場

《日本トラスト協会環境功労賞授与式》

日本めだかトラスト協会環境功労賞の授与式が行われ、日本めだかトラスト協会岩松鷹司会長より賞状並びに記念品が授与された。



受賞者 NPO法人シニア自然大学水辺環境調査会
代表 林 美 正 氏



受賞者 藤沢メダカの学校をつくる会・PTA
代表 渡 部 かほり 氏



第1 分科会



第2 分科会



第3 分科会



特別分科会

めだかサミット in よつかいどう

第11回全国めだかシンポジウム四街道大会

報告要旨集

2009. 8. 8～9

四街道市文化センター

分科会の名称と会場

第1分科会	自然環境を生かすまちづくり	201号室
第2分科会	メダカ研究最前線	202号室
第3分科会	子どもの育ちと自然	203号室
特別分科会	ホタルと水辺環境・水辺の生物たち	208号室

主催 めだかサミット in よつかいどう実行委員会

日本めだかトラスト協会

も く じ

第1分科会 自然環境を生かすまちづくり

- | | |
|--|---------------------------|
| 坂川再生のプロジェクト | 林 薫 (千葉県県土整備部河川環境課) |
| 持続可能なまちづくり支援事業について | 中村 大介 |
| むくろじの里ってどんなところ？ | 山崎 輝清 (四街道メダカの会) |
| 畔田谷津での活動と公園予定地になるまで | 小野由美子 ((財)佐倉緑の銀行) |
| この人でいいのか 環境再生をする人々の仕事を評価する Kikyo という単位 | |
| | 吉田 寛公 (会計研究所 千葉商科大学大学院教授) |

第2分科会 メダカ研究最前線

- | | |
|----------------------------------|-----------------------|
| 野生メダカの生息調査から見た生物多様性国家戦略の現状 | 岩松 鷹司 (日本めだかトラスト協会会長) |
| メダカのオスとメスがどのようにして決めるのか | 松田 勝 (宇都宮大学准教授) |
| 千葉県のメダカ生息分布から見えてきた課題 | 田中 正彦 (犢橋高等学校教諭) |
| 四街道メダカのDNA解析 | 原田 功 (四街道メダカの会) |
| メダカの生息地調査に基づく現状と実態及びメダカの生息環境について | |
| | 川角 志保 (南山大学) |

第3分科会 子どもの育ちと自然

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 子ども発達と自然とのかかわり | 井上美智子 (大阪大谷大学 児童福祉学科教授) |
| 里山保育の実践 | 宮崎 栄樹 (木更津社会館保育園 園長) |
| 四街道市における「子どもの育ちと自然」事例報告 | 小沢 武 (四街道自然同好会) |
| 自分の責任で自由に遊ぶ | 篠原陽子、岸本梓 (四街道プレーパーク どんぐりの森) |

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち

- | | |
|------------------------------------|---------------------|
| 農業環境の変化とメダカ、ホタル | 西 友夫 (夷隅郡市自然を守る会) |
| 一宮町の里山周辺におけるメダカ・ホタルを中心とした生き物の現況 | |
| | 戸張 七重 (一宮ネイチャークラブ) |
| 市川市大町自然観察園におけるヘイケボタルの保全と市民向け鑑賞会の実施 | |
| | 金子 謙一 (市川自然博物館) |
| 四街道市内のホタル調査と保全活動 | 松川 裕 (四街道自然同好会) |
| 環境美化のために各地で放流されているゲンジボタルと地域性の問題 | |
| | 笹木智恵子 (緑と水の会) |
| 学校ビオトープを活用した地域の自然再生 | 野口理佐子 (人と自然の研究所) |
| 八千代のホタル事情 | 加藤 賢三 (八千代ホタルフォーラム) |

第1分科会 自然環境を生かすまちづくり

題名 坂川再生プロジェクト

報告者名 林 薫

連絡先 043(223)3155

所属団体 千葉県県土整備部河川環境課

報告要旨

松戸市内を流れる坂川は、かつて（昭和の終わりごろ）は汚いどぶ川の代表格でした。しかし、近年20年くらいの間、官民一体となったとりくみにより、清流が復活し、いきものや人々も川にもどってくるようになりました。

今日50万人クラスの大都市のまん中で、多種多様ないきものにこれだけ身近にふれられる川は、全国的にもなかなかないといっているでしょう。最近では県外のみならず海外から視察団も訪れるようになりました。

今回は、まち中を流れる都市河川における多自然川づくりの好例として、特に以下の3点を主なポイントとして、坂川再生のとりくみを報告します。

1. 自然再生
2. 親水性の確保
3. 市民と行政の協働



第1分科会 自然環境を生かすまちづくり			
題名 持続可能なまちづくり支援事業について			
報告者名	中村 大介	連絡先	所属団体
報告要旨			
1 趣旨 少子高齢化、人口減少時代に対応した今後のまちづくりには、歩いて暮らせる範囲に都市機能やサービスが集約されるなど、持続可能なまちづくりが求められています。 本事業は、このようなまちづくりを進めていくために、まちづくりの主体である市町村が地域住民とともに進める様々な取組みの支援を行うものです。 2 支援の対象地区 市町村と地域団体等が協働してまちづくりに取組む地区。 県内市町村等から先進的な地区を公募し、「県庁内連絡会議」においてモデル地区を選定します。 3 支援の内容 モデル地区については、専門家の派遣や「県庁内連絡会議」を活用したバックアップ等の支援を行います。 4 平成20年度支援地区の状況 平成20年度では、下記の6つのモデル地区において専門家派遣などを実施しました。 ()は地区の名称 1. 君津市（久留里駅周辺） 協働団体 : NPO法人 久留里フィールドミュージアム 取組み概要: 移住・交流事業の展開による定住人口・交流人口増加促進、まちなか活性化 2. 佐倉市（佐倉市南部地域） 協働団体 : 地域の自治会等 取組み概要: 市街化調整区域における中心集落活性化 3. 木更津市（木更津駅周辺） 協働団体 : 商工会議所や地区内の住民 取組み概要: 駅周辺地区の活性化に向けた都市機能の検討 4. 一宮町（町全域） 協働団体 : 地域の自治会等 取組み概要: 住民参加による新しいまちづくり指針策定に向けた課題整理 5. 御宿町（新・旧市街地、里山） 協働団体 : 御宿活性化委員会、中山間地域総合整備事業（御宿地区）実行委員会 取組み概要: 新・旧市街地と里山が連携した交流の促進や拠点整備等による産業連携強化 6. 県都市計画課（高度成長期の大規模住宅団地） 協働団体 : 関係市町村及び事業者等 取組み概要: 高度成長期に建設された大規模住宅団地における課題についての対応検討			

題名	ムクロジの里 ってどんなところ？		
報告者名	山崎輝清	連絡先	所属団体
四街道メダカの会（ムクロジ会世話人）			

報告要旨

四街道って？ 東京方面からJRで千葉を経由して成田に向かう途中にある、面積約35Km²、人口8万7千人の小さな市（まち）で、東京のベッドタウンです。電車で来ると都心から40Kmずっと続いていた市街区域から、突然に田園風景「里やま」に変わる臨界ライン「里際（さとぎわ）」に当たります。生き物たちにとっては追いやられつつあるものの、一方では生き残ろうと一所懸命頑張っている、まだまだ自然が残っている境界領域です。まさにその里際の最前線に位置した小谷津にあるのが「ムクロジ（自然）の里」です。メダカの会の発足のきっかけになった絶滅危惧種「メダカ」が、2001年に四街道に何とか自然状態で残っていることが分かり、「その保全とメダカが棲める環境を守ろう」と結成されたのが「四街道メダカの会」です。その保護活動の一環としてメダカ池作りが始まり、その一か所が今のムクロジの里です。地主さんの好意により、休耕田に池は作ったもののメダカは思うように増えてくれません。やはりいかに環境作りが大切かを思い知らされ、池だけでなく周囲の環境整備を始めたのがこの里での活動の始まりです。メダカの会が近隣住民に呼びかけで池周辺の放棄田の整備をはじめたのが2003年夏で、翌年の2004年には正式に「ムクロジ会」と名づけて、池の手入れ、復田作業、草地の整備、林縁の整備などを毎週木曜日に自主的に行い、現在まで継続しています。

「ムクロジ」とは広葉落葉樹の名前に由来するもので「無患子」と和名されています。「子どもに患いが無いように」との願いが込められた、秋には黄葉のとても美しい大木で、昔はその実を洗剤として使用していたようです。

「ムクロジ会」はメダカの会の経済的支援（各方面からの補助金確保）を受けながらムクロジの里の維持に努めているボランティア活動グループで、会則なし・会費なし・ノルマなし（ムクロジ会三無方式）の全く自由な参加方式で成り立っています。活動モットーは「**そこにある普通の自然を大切に！**」です。この活動の特徴は、①自主的、自由参加、自分の目線で作業する。②生き物調査を、毎回年間を通じて実施している。特に②は、そこに自然に生きている生き物を、全体的にあるがままに捉え認識を高めながら、常に生き物の目線で手入れをしていることが特徴です。

昨年から環境省が公募した「1000里地調査」にも参画したことにより、長期的に全国レベルの生き物調査に寄与できるでしょう。

この里にはメダカはもちろん、ホタルやトンボ・蝶・カブトムシ・ヤマトタマムシなどの昆虫、アカガエル・ヘビなどの両生・爬虫類、サシバなどのワシタカ類やカワセミ・サギ類・オオヨシキリ・ホオジロなどの鳥類、ノウサギ・カヤネズミなどの哺乳類、アシ・マコモ・オギ・タコノアシ・サワオグルマ・ツボスミレ・コケオトギリ・カワモズクの植物など多様な生き物が生息しています。取り分け、この里の景観のあるがままの「自然さ」がひきつけるのでしょう、今では地元の隠れた安らぎの場所として、子どもたちや若者、家族づれ、お年寄りなどが静かに訪れて、自然と触れ合って楽しみ、休息している姿がとて多くなりました。

問題点は継続性です。地権者の了解、地域（特に近隣）住民と行政の理解と協力、経費の保証（の無さ）、参加者の維持などです。どこでも同じ問題ですが、いかに持続可能な環境と活動が行われるかの工夫が常に必要です。

具体的な活動状況の一端を当日ご紹介致します。

第1分科会 自然環境を生かすまちづくり			
題名 畔田谷津での活動と公園予定地になるまで			
報告者名	小野 由美子	連絡先	所属団体 (財) 佐倉緑の銀行
報告要旨			
1. 畔田谷津が公有地になるまでの経緯 ◇1998年から 市民による保全活動 要望書、ビオトープづくり、農家支援（米づくり）・・・ ◇2001年 佐倉市自然環境調査報告書 研究者の支援 自然環境評価 第1位 畔田・下志津地区、岩富地区 ◇2005年 谷津環境保全指針策定 ◇2005年 購入 ◇2006年 畔田谷津環境保全整備事業 開始 ◇2007年 畔田谷津ワークショップ 開始 2. なぜ公有地にできたのか 1) 市民の声 なによりもまず、後世に残したいという市民の熱い思いが基本である。 2) 時のタイミング 情勢の変化を的確にとらえ、呼応する動きと勢いをチャンスとする。 区画整理事業準備会の解散、大手開発業者における不良資産の整理など。 3) 当時の市長が自然環境保全に理解があったこと 首長が、この分野にどれだけ理解を持っているかがポイントの一つとなる。 4) 市の施策における位置づけがあること 畔田エリアには従来から大型公園計画が策定されていた。 市として位置づけがないと購入は難しい。 5) 財源として適切な積立金が存在していたこと ①購入の財源 緑環境基金条例 過去に緑の保全に関する条例が制定されており、十分な積立金が、一般会計とは別に存在した。 ②維持管理の財源 助成金、(財) 佐倉緑の銀行			

1. 会計は「この人でいいのか？」に応える

会計は、単なる数字の羅列でもなく、複雑な表を作成することでもありません。

会計の役割は、会計が始った4千年前から適材適所を実現することでした。

環境会計においても、環境再生に係わる人達の仕事が正当であったか否かを、説明します。

良い環境会計は、環境再生をする能力のある人と、ない人を見分けることを可能にします。

2. 継承財としての環境。

あり余るほど豊富に手に入るものを自由財といいます。環境は、自由財とされてきました。環境があり余るほど豊富に手に入るのは、昔の話になりました。環境は、親から子へ、子から孫へと継承する継承財です。継承財は、生まれた時に継承します。これまで私たちが意識してきた財（獲得財といいます）と違って、対価を払わずに受取ります。多くの人は環境の価値に気がつきません。その価値に気づくのは、環境が失われた時となります。

他人に迷惑をかけないことが、獲得財を持っている人の責任です。継承財を預る者の責任は、継承財の価値を損なうことなく次世代に伝えることです。

「子供にツケをまわさない」という責任です。

3. 環境再生をする人達の成果を測るkikyo

言葉と貨幣と単位を利用することで、私たちは見知らぬ人の仕事を評価し、利用することができるようになりました。毎日食べる米や服を作った人のことを、私たちが直接知っていることは希です。市場を通じて、他人の成果を利用して、私たちは豊かな生活を享受しています。

環境再生をする人達の成果を測定するのがkikyoという単位です。生き物の種の数により環境再生の成果を測ります。簡単に計測できることでたくさんの人が理解が可能になり、単位として有効になります。環境を再生する地域で観察される種を選び、その種数を掛合わせてkikyo数を求めます。

kikyo基本式=(一次消費者or生産者(在来種数- 外来種数))

×(二次消費者(在来種数- 外来種数))×(1+三次消費者) (在来種数- 外来種数)

水辺kikyo=(魚在来種数- 魚外来種数)×(トンボ在来種数)×(1+鳥在来種数- 鳥外来種数)

里山kikyo=(食べられる植物在来種数- 同外来種数)×(トンボ在来種数)×(1+鳥在来種数- 鳥外来種数)

4. 里山kikyoの適用例

C.W.ニコルのアフンの森での、環境再生の成果を里山kikyoで測定しました。



第2分科会 メダカ研究最前線				
題名	野生メダカの生息調査から見た生物多様性国家戦略の現状			
報告者名	岩松鷹司	連絡先	所属団体	愛知みずほ大学非常勤講師・愛知教育大学名誉教授
報告要旨 近年、動植物が急激に地球上から消え、次第に失われてゆく生物多様性がクローズアップされるようになってきた。生物多様性の消失問題の背景には、大気・海洋の汚染による地球環境の悪化及び工業化学物質や移入生物による生態系のかく乱の問題がある。話題になっている気象や地球表面の急激な変化は、人間がもたらすエネルギーの流れの変化であって、地表に棲む生き物の生息分布や存在様式にも変化をもたらしている。その変化に順応できない生き物は絶滅を余儀なくされている。 I. 人間の自然との係わり (略) II. わが国における自然環境保全の取り組み (略) III. 野生メダカから見た水域生態の現状 (略) IV. 野生メダカの生息調査にみる人害 (略) V. まとめ 我々は、このような自然環境の調査活動を含めて、自然環境保全のための啓蒙教育の活動を活性化するために、10年来毎年全国各地で全国めだかシンポジウムを開催している。その活動の中で、都市とその周辺に住む市民はガーデニング、ビル家屋での緑化、ビオトープづくり、山林・里山・湧き水の保全、植林などの活動が活発になってきたことを知ることができる。緑の触れ合いを求める生活の余裕が生じ、自然環境に対する認識を深めることに努めている表れである。田舎の風致地区に見る田畑も、外観上ほぼ昔ながらの景観を保っている。しかし、従来の生物多様性を育む水辺は、前述のように汚染と減少の一途を辿っている。こうしたことに加え、農山漁村地域で自然を活かして生計を立てている人々は、今なお経済及び生活に関わり合いのない生き物や自然環境の保全には余り関心がなく、とりわけそれらの生き物は人々にはむしろ労力と経済の両面で邪魔物であり、生き物の種類によっては事を被る外敵としか見えていない現状がある。 現在地方公共団体においては自然環境保全に対して積極性が認められなく、農地改良工事も多様な生物の保全に配慮のない旧態依然のままで行われ、生活の効率・利便性のみを優先する行政がある。環境相は「旧生物多様性国家戦略」の中で、学校教育において植物や動物の生活と種類、生物のつながり、生物多様性やその保全の重要性について指導していると述べているが、ペットやレジャー用の外来生物を自然環境へ放置するとか、理科の授業に用いた教材ヒメダカを周りの水辺に放流している実態から推しても理念の指導が反映されていない。理科教育における「生命の尊重」の誤認、または個人的感傷が先行し、自然環境の保全が重視されていない表れである。また、治水上の観点から在来生物が棲めない川や用水路、溝などの水辺をつくり、そこに在来生物を駆逐するカダヤシやコイなどを移入している地方公共団体が多い。このように、生物多様性国家戦略に関する国の取組みは、環境教育が徹底していないため地方にはまだ充分浸透しておらず、自然を理解・洞察する能力と自然環境保全（破壊防止）に対する積極的な活動力が養われていないのがわが国の現状である。 おわりに 以上環境省の述べているように、一般市民、事業者、民間団体、政府及び地方公共団体などすべての関連部門において生物多様性に関する理解を深め、知識や技術を向上させることが、自然環境保全のためには基盤的で、極めて重要である。とくに、地域固有の在来種の生態系保全のためには、天敵のいない外来種については天敵に代わって人為的に除去し続ける努力が不可欠である。同時に科学的認識を基礎とした自然環境や生物多様性の保全への取組みを進める上で、地方公共団体は専門の技術者や研究者の養成・登用等が不可欠である。とくに、農地・宅地・道路などの開発に際しては、必ず専門家の協力を得て生き物を一時的にトラスト・保持するための検討・事態を行った後で、工事を実施するシステムによって、自然環境の網発を規制・監視することが望まれる				

第2分科会 メダカ研究最前線			
題名	メダカのオスとメスとがどのようにして決まるのか？		
報告者名	松田 勝	連絡先	028-649-5527 所属団体 宇都宮大学
報告要旨			
ヒトを含むほ乳類の性別は遺伝的に決められています。XX-XY 型の雄ヘテロの性決定様式で、性染色体の組み合わせにより性別は決定します。また、その実体は Y 染色体上の SRY 遺伝子であることが分かっています。すなわち、SRY 遺伝子が働けば雄に、働かなければ雌になるのです。この SRY 遺伝子は、ほ乳類（真獣類）に共通の性決定遺伝子であることも分かっています。一方、ほ乳類以外の脊椎動物の場合、多くの種で性別は遺伝的に決められていることから性別を決める性決定遺伝子が存在するはずですが、そのような遺伝子は、ほ乳類の性決定遺伝子発見以降、長らく見つかっていませんでした。脊椎動物で2番目となる性決定遺伝子は世界に先駆け、メダカで発見されました。このメダカの性決定遺伝子は、X 染色体には存在せずに、Y染色体だけに存在します。また、ショウジョウバエの性分化に関わる DSX 遺伝子と線虫の性分化に関わる mab-3 遺伝子に保存されているアミノ酸配列と相同な DM ドメインと呼ばれる配列を持っていたことから、DMY と名付けられています。 本発表では、メダカの性決定遺伝子の解析から分かってきた最新の知見を紹介します。 まず、メダカからみつかった DMY 遺伝子はメダカとメダカの近縁種であるハイナンメダカのみに存在していました。ほ乳類に共通な SRY 遺伝子と比較すると大きな違いです。 メダカ DMY 遺伝子の機能不全個体は雌になります。機能しない DMY 遺伝子を持つ Y 染色体 (Y- とします) は X 染色体と等価なので、Y-染色体を2本持っている Y-Y-個体は、雌になります。一方、正常な Y を1本持つ Y-Y 個体は、雄になりますから、この系統では雄と雌との遺伝子の違いは非常に小さくなります。 また、この DMY 遺伝子のあまり作られない Y 染色体 (Y* とします) を持つ XY* 個体は、DMY 不足のため雌に分化しますが、この Y* 染色体を2本にした Y*Y* 個体は、DMY が充足され雄になります。この場合、XY* は雌、Y*Y* は雄ということで、雌ヘテロ (ZZ-ZW 型の) 性決定システムへと変換しているのです。つまり、性決定遺伝子の機能低下により、性決定システムが変換しうること示しています。 さらに、DMY 遺伝子を XX 個体に導入すると、DMY の導入された染色体が性染色体となることが分かってきました。つまり、「性染色体を作る」ことができるのです。また、精巢分化に重要な遺伝子の突然変異体は、XY ながら雌へと分化することが分かってきました。この変異体をうまく交配することで、「性決定遺伝子を作る」こともできることが分かってきました。 この様に、メダカの性決定遺伝子が明らかとなつて、様々な研究が進んだことで、脊椎動物の性決定の実体が、次々と明らかになってきています。			

第2分科会 メダカ研究最前線				
題名	千葉県におけるメダカの分布調査 千葉県のメダカ生息分布から見えてきた課題			
報告者名	田中正彦	連絡先	所属団体	千葉県立犢橋高等学校
報告要旨				
1999年から市民参加型による千葉県内のメダカ分布調査を行った。調査方法は、メダカ分布調査カード「こだわってメダカってカード」を、NPO法人ちば環境情報センターのネットワークを使って広く市民に配布し、回収する形で行った。 2008年までに142人から367枚のカードが寄せられたが、メダカとカダヤシなど他種と見間違えている可能性のある情報もあり、こうした場合はできる限り筆者が現地に出向いて調査した。 カードの情報と演者が別に実施した調査結果を合わせて、東京情報大学の協力のもと、県内メダカ分布図「こだわってメダカってマップ」を作成した。 その結果、人為的放流による可能性を含めて、メダカは北総地域など県内に広く分布していることが分かった。特に千葉市などに残る谷津田や土水路ではメダカの生息密度が高く、こうした環境がメダカの生息にとって重要であることがわかる。 東京に近い臨海部や南房総地域からのメダカ生息情報はなかった。生息が確認できなかった地域については、都市化や圃場整備による水路のコンクリート化など環境改変により、生息環境が消失してしまった可能性があるが、情報不足の点もあり今後検討を要する。				

第2分科会 メダカ研究最前線			
題名	四街道メダカのDNA解析		
報告者名	原田 功	連絡先043-423-3506	所属団体NPO法人四街道メダカの会
報告要旨			
四街道メダカは東日本サブグループⅠ型—DNA鑑定結果— メダカのDNA解析を多摩動物公園野生生物保全センターに依頼した。 ①成山メダカ池 移転のため昨秋以後捕獲とそれ以前に採取し水槽で繁殖させていたメダカ。 ②鳥の下・ムクロジの里メダカ池 5年前、成山で採取し、放流して繁殖したメダカ。 ③第1めいわ調整池 昨年の調査時、それまで見られなかった多くのメダカを確認。今秋採取したメダカ。 のそれぞれ14個体のメダカの背びれの細胞のミトコンドリアDNAを解析し、四街道市に生息するメダカの 違いを遺伝子レベル調べた。 日本におけるメダカ (<i>Oryzias latipes</i>) の系統は北日本集団と南日本集団に分かれているといわれる。 南日本集団はさらに8～9つの型に分けられ、四街道のメダカは東日本型（さらにⅠとⅡに分けられているようだが、詳細は不明）に属している。 ＜解析結果＞ ①成山メダカ池 13個体から東日本サブグループⅠ型 1個体から瀬戸内サブグループ ②ムクロジの里 8個体から東日本サブグループⅠ型 3個体から瀬戸内サブグループ 2個体から東日本サブグループⅡ型 1個体から東海サブグループ ③第1めいわ調整池 7個体から瀬戸内サブグループ 5個体から東日本サブグループⅡ型 2個体から東日本サブグループⅠ型 ＜考察＞ 1. 成山のメダカ池①を含め、今回解析した地区のメダカは完全に純粋なものではなかった。全体の解析結果や繁殖の状況から、四街道固有のメダカは東日本サブグループⅠ型である。 2. ②には成山からメダカを移入した。三重県のメダカを放流した人がいた情報もあったが、解析でもそれが裏付けられている。他にもメダカが放流されたと推定される。 3. ③では、上流からまたは池に直接メダカが放流されたと推測できる。そのメダカは、様々な型の遺伝子が混入されている。 4. ①での遺伝子の混入については、ムクロジの里から稲苗の移植を行った経過がある。その時、卵などが付着していたか、水槽で管理している中で扱いの不手際から他の遺伝子が混入した可能性もある。 5. ①②に遺伝子の混入があったが、動物園の富田氏は、そのことによってメダカの生息環境の保全という面での大切さは変わることはないと言っている。 6. それぞれの解析は14のサンプルで行った。その統計学的な考察は行っていないので、純度等をどう考えるかは今後の検討としたい。 遺伝子がどのようにして混入したかの推理をめぐらすことは、人の行動を分析する別の研究としてはおもしろいかもしれない。しかし、この解析だけでも放流がその後、遺伝子レベルでは影響が残ることが明確であり、今後、結果を有効に生かしたい。解析に係わっていただいた多摩動物園の富田様、解析担当の小川様、また、メダカ採取を行ったメダカの会員に感謝します。			

第2分科会　メダカ研究最前線																														
題名	メダカの生息地調査に基づく現状と実態及びメダカの生息環境について																													
報告者名	○　川角志保、　　　成田靖子　　　連絡先　090-8079-3926　所属団体　南山大学総合政策学部 Shiho-224@C.voda50ne.ne.jp																													
報告要旨																														
1999年2月、環境庁は「日本の絶滅のおそれのある野生生物のリスト（レッドリスト）のうち、汽水・淡水魚類についての見直し結果を発表した。その76種の中にメダカが含まれていた。発表者にとってメダカは子ども時代からなじんできたさかなである。本当にメダカはいないのだろうか」と調査を始めた。 そこで、メダカの生息地調査に基づく現状と実態について、及びメダカの生息環境についても、写真のスライドショーを通して発表・考察する。 次にメダカをどれだけ常識しているか大学生を中心にアンケート調査を行った。その調査結果をグラフで表示し、それを分析し・考察して、なぜ今メダカなのかを考える機会としたい。 結果の一部を紹介すると、（調査母体数327人、内、男性136人、女性191人） ★「あなたはニホンメダカを見たことがありますか」という質問に対して 次のような結果が得られた。 <table><tr><td>「はい」</td><td>……185人</td><td>56%</td></tr><tr><td>「いいえ」</td><td>……137人</td><td>42%</td></tr><tr><td>「無回答」</td><td>…… 5人</td><td>2%</td></tr></table> 「いいえ」の多さに驚く。 ★「あなたはメダカをどこで見ましたか？」という質問の答えは 以下のものであった。 <table><tr><td>「川」</td><td>……</td><td>63人</td><td>34%</td></tr><tr><td>「水族館」</td><td>……</td><td>53人</td><td>29%</td></tr><tr><td>「田んぼ」</td><td>……</td><td>26人</td><td>14%</td></tr><tr><td>「水族館」</td><td>……</td><td>25人</td><td>13.5%</td></tr><tr><td>「その他」</td><td>……</td><td>37人</td><td>17%</td></tr></table> 「水族館を見た」という答えが多く見られた。近い将来、メダカは水族館で見られるものになるかもしれない。 （アンケートに回答してくれた人たちは、北海道から鹿児島まで広範囲であったが、大学の立地条件から、愛知、岐阜、三重、静岡の中部4県に集中したデータとなった。） 考察として水田地帯から生き物が消えていった理由を農業政策を含め、生物多様性に関する現状の課題として提示したい。		「はい」	……185人	56%	「いいえ」	……137人	42%	「無回答」	…… 5人	2%	「川」	……	63人	34%	「水族館」	……	53人	29%	「田んぼ」	……	26人	14%	「水族館」	……	25人	13.5%	「その他」	……	37人	17%
「はい」	……185人	56%																												
「いいえ」	……137人	42%																												
「無回答」	…… 5人	2%																												
「川」	……	63人	34%																											
「水族館」	……	53人	29%																											
「田んぼ」	……	26人	14%																											
「水族館」	……	25人	13.5%																											
「その他」	……	37人	17%																											

第3分科会 子どもの育ちと自然			
題名	「子どもの発達と自然とのかかわり」		
報告者名	井上美智子	連絡先	所属団体 大阪大谷大学
報告要旨			
1. 人間と自然 子どもと自然について考える前に、人間と自然との関係を考える必要があります。人間にとって、自然とは何でしょうか？ この答えは簡単には見つかりません。哲学の長い歴史の中でも常に取りあげられてきた問いです。答えはないのですが、私たちは、自分自身が自然であると同時に、自然を対象化してみる存在です。また、人間だけの歴史と文化を育んできた存在です。これらを、自然性と人間性という表現で表してみたいと思います。 2. 子どもの発達 子どもは、成長し、発達する存在です。分野によっても違うのですが、成長というと身体的・生理的な機能の量的な変化を意味することが多く、一方の発達は、心や知能、精神的な機能が質的に変化していくことを意味します。自然とのかかわりは、身体能力にも関係しますが、どちらかという発達への影響がよく取りあげられます。 3. 子どもの発達と自然とのかかわり 教育の長い歴史の中で、子どもが自然とかかわる意義は認められてきました。科学教育・理科教育はその一つです。心情的な育ち・人間性の育ちなどもよく語られます。また、子どもといっても、18才未満を子どもとした場合、幼児や小学校の低・中学年の子どもの10代の子どもの発達の姿が全く異なるので、同じような扱いはできません。自然とのかかわりも同様です。 4. 大人に求められること 自然とかかわる場面で大人に求められることは、子どもの発達段階によって異なります。一つ目のキーワードは共感です。幼い子どもの場合は、子どもの気づきに大人が共感することが重要です。10代の子どものためには、子どもの方が共感を覚えるような大人と出会うことに意味があります。二つ目は、環境を作ることです。子どもは園や学校や、自然観察会だけで学ぶものではありません。日々の暮らしの中から学んでいきます。大人が自然に対してどのように向かっているかを常にみており、そこから学ぶのです。いくら学校で自然保護は大切だと教えられても、自分の暮らしている街で自然を粗末に扱っていれば、自然保護は大切だというのはスローガンに過ぎないということを学ぶのです。大人は、それを心に留めておかななくてはなりません。			

第3分科会 子どもの育ちと自然				
題名	里山保育の実践 子供の育ちと自然の関わり			
報告者名	宮崎 栄樹	連絡先	所属団体	木更津社会館保育園
報告要旨				
「自己否定しよう！」「園舎もピアノも玩具もフェンスも何もなし。みんな捨てて森に入ろう。」「20年前の全面的な自己否定の結果は、素晴らしい成果となって花開いている。この完成状態を維持するのはもう無理。全てを捨てて森に入ろう。」 1999年2月の私の爆弾提案は、翌3月19日「森の保育園」として実行に移された。場所は、内房線木更津駅から大人が歩いて20分程の山寺の境内。本園から子供達の徒歩で45分の「森の保育園」に朝、親に送ってもらった「くじら組」全員が登園した。早朝保育の子供達は、保育士が本園から自動車ですててくれた。 くじら組主任池田保育士「園長。森の保育って何をするのですか？」園長「分からない。森にいてくればいいよ。畑があったら入らないように。人に会ったら必ず挨拶をしてね。」 園長の山寺は、3000坪の境内に、寺院の伽藍とうっそうとした森が広がっていた。が、朝の9時から夕方4時頃までを過ごす子供集団が、その周辺の山里にあふれ出ていくのは自然の成り行きだった。整備された山寺(そこに屋外トイレ・職員休憩所！あり。)の中よりも、周辺の谷津田や森の蛙メダカや昆虫たちの方が、子供達の興味関心を惹きつける力は圧倒的だった。 第1、本園を捨てることは実現した。第2、森の楽しみを、担任と子供集団は見つけられたか。3年目に入るまで、保育士達のエネルギーの殆どは「子供達の安全」に集中されていたと聞く。2名の保育士達が、交代で昼休みをとっている間も「子供の行方不明」が気になって、ゆっくり休めなかったと聞いた。 しかし親たちは、「森の保育」の中止を申し出ることがなかった。年間10回程の1年目、年間15回程の2年目。3年目、山寺の裏山に20坪の「森の家」が作られた頃、「森の天才」直井洋司氏の存在は、大変な魅力となって子供達を森に惹きつけるようになっていた。 低体温であった美保ちゃんの体が温かくなっていた(自律神経が変動した?)本園で影が薄い子供達が「虫博士・花博士」となって、大活躍する(隠れた才能の発現)大人の目が届ききれない森の中で、しっかり者のリーダー達が、先生の代わりを果たす(子供集団の自律性が深化)何よりも自然の中に入った子供達が、とたんに元気になり、別人になるような感じが不思議だった。 森・里山はのどかな安全地帯ではない。のどかな不思議さ美しさと共に、蝮の牙、スズメバチ・クマンバチの針が待っている。フェンスのない伸びやかさは、迷子になったら無限の迷子道。急坂や凸凹道で転んで泣くなんて赤ちゃん。メダカ・ドジョウ・タガメ・クワガタ等々、山の友達に会える楽しみがあればこそ、転んでも泣かない、喧嘩しても根に持たない、怪我をしてもグッと堪える子供達が育っていく。単純ではない子供達。 人工の22kヘルツ以下に限定されたCD音等に囲まれて、人の心身は衰弱変調していきます。聞こえない音を聞き、見えない色彩を見て人の感性は熟していきます。「森の保育」が始められて10年が経った。				

題名 **自分の責任で自由に遊ぶ** 《四街道プレーパーク どんぐりの森》

報告者名 篠原陽子、岸本梓 連絡先090-6197-6735 所属団体 四街道プレーパークどんぐりの森

報告要旨

子どもの遊びってなんでしょう？寝ることや食えること、勉強することと同じように「遊ぶこと」は子どもの権利です。



そんな子ども達の自然の中での遊びの空間を「プレーパーク」として見守っているのが「四街道プレーパーク どんぐりの森」です。

四街道市和良比地区にわずかに残る里山を地権者の方よりお借りし、子どもたちと森の手入れをしながら冒険遊び場を開いています。

週に3日、参加費は無料。いつでも、誰でも、1人でも、自由に遊べる場です。プレーリーダーとスタッフが子供達を見守っ

ています。

『自分の責任で自由に遊ぶ』とともに『自然を体全体で感じ、自分も自然の一部であることを大切にしよう』の二つをテーマとし、泥んこ、穴掘り、探検など子ども達は自分の思い思いの遊びを展開しています。赤ちゃんから小学生そして高校生まで、いろんな年齢の子ども達とその成長にあった遊びを通し、自然に触れています。どろんこのぬるっとした感触、風が木の葉をゆする音、セミや虫、鳥達のさえずり。そして雨上がりの土や焚き火の煙の臭い。季節の移り変わりを肌で、体全体で自然を感じています。

子ども達の遊びを通してであった自然は、原風景となって心と体に残り、いつしか自然を大切に思う心を育み、さらに遊びの中での小さな挑戦や工夫や失敗は心と体を鍛え、生きる力を育むことになっていくのでしょうか。

大人も「だめだめ！」と言わずに、どろんこになってもちょっとくらいケガをしても、暖かく見守ることが大切です。

<活動の概要>

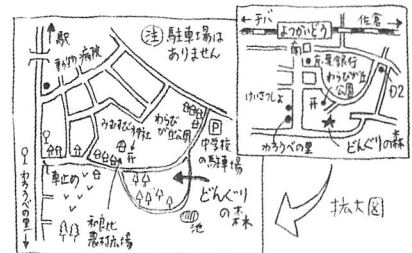
- 1日プレーパーク 毎週月・金・土曜日(10時～17時)
- 連続プレーパーク 夏休み、冬休み、春休み
- 栗山出前プレーパーク 毎月第1木曜日と長期休み
- 森の手入れ 随時 森の手入れ及び遊具の点検・安全対策
- 自然観察会(年4回・自然観察指導員協力)
- 視察・研修会・学習会など
- 小学校・子ども会・NPOなどの団体参加の受け入れ
- 四街道市プレーパーク事業委託運営

<連絡先>

四街道プレーパークどんぐりの森 090-6197-6735

E-mail donchan@dongurinomori.net

H.P <http://www.dongurinomori.net/>



特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち			
題名 農業環境の変化とメダカ、ホタルーいすみからの報告			
報告者名	西 友夫	連絡先	いすみ市岬町井沢1023-8
		所属団体	夷隅郡市自然を守る会
報告要旨			
1. はじめに			
旧夷隅郡市は、「ゲンジボタルの里」として有名な山田地区などゲンジボタルの生息地がいくつもあり、千葉県レッドデータブック記載種の水辺の生物も多い自然豊かな所として知られる。「ホタルの里」に昼間行ってみれば青々とした見事な水田が広がっていることでわかるように、夷隅の多様な生物は、米づくりを中心とした農村の暮らしとともに生きてきた里山の生物たちである。 しかしメダカについてみるとその生息状況はきわめて厳しい。これには、水辺環境の変化、さらには現在の農業をとりまく厳しい状況という背景があると思われる。この問題は米づくりが盛んな土地故の問題であり、今後も豊かな里山を守っていくために考えていくべき大きな問題だろう。こうした点について考えてみたい。			
2. 夷隅の里山と多様な生物の現状			
旧夷隅郡市では農業、漁業が重要な産業であり、多くの生物も里山、里海で生きてきた。水辺の生物にとっては、夷隅川等の河川とともに、水田やその脇を流れる用水路、堰等が重要な生息の場であり、こうした環境で50種近くの千葉県レッドデータブック記載種が確認されている。ゲンジボタル、ヘイケボタルもメダカもその例である。また、川の生物の中には海から遡上してくるものも少なくない。黒潮とのつながりが見られる点も夷隅の河川生物の特徴の一つであり、里山、里海のつながりを考える材料にもなっている。 山田地区の「ホタル祭り」には東京などからも見学者が集まる。都市部ではめったに見られなくなった野生生物がごく身近に見られることは、我々地元の人間にとっては自慢なのだが、ことメダカに関しては事情が異なる。山田地区ではメダカは見られないし、我々が調査した結果では勝浦市内でも生息している所はほんの一部、いすみ市の塩田川水系でもほとんど見られない。比較的多いのは海岸近くの町の水路であるが、夷隅全体としては非常に少ない魚になってしまっている。			
3. 水辺環境の変化とメダカの危機			
学名の由来に水田を持つメダカがなぜ水田地帯の夷隅でいなくなってしまったのか。理由は、圃場整備事業による水田と水路の改修、護岸工事である。山田地区の水路も深く掘り下げた三面コンクリートである。山あいの水路を上流へ上流へと上っていくと、最後までコンクリートで堰に行き着くという所がとても多い。 コンクリート水路でも何もいないわけではない。春、ゲンジボタルの幼虫が上陸して蛹になる時にはコンクリートの壁をよじ登る。川底に砂泥がたまってホトケドジョウがいたりする。しかし浅く速い流れにメダカはいない。また水田の乾田化も相まってカエル類も打撃を受けている。クサガメ、イシガメといった淡水産のカメ類もコンクリート水路では生きられない。種類によって影響はさまざまである。現在、メダカ、ヘイケボタル、アカガエル類、トウキョウダルマガエル等の見られるある水田地帯でも、これから圃場整備が行われる予定であり、推移が心配である。			
4. ホタルとメダカの将来は？			
今後は「生態系に配慮した圃場整備」等の対策が考えられるが、今の農業者には余裕がなくなっているように見える。「10年後には誰がやっているだろう」という声も聞く。そもそも子どもの代がこの地を離れた家も多い。日本では農業や漁業は食と自然を守る大事な産業ではないということか。こうした中で「田んぼをやめるつもりだったが圃場整備をやるので続けることにした」という声も聞くと複雑な思いを感じてしまう。 生物の宝庫であるが手間のかかる谷津田が耕作放棄されどんどん荒れている現状がある。そう思うしかないと思っている農業者も多い中で、ボランティアの協力で再生しようという取り組みがある。こうした取り組みの中に、今後の方向を示す一つのヒントがあると思う。			

報告要旨

1. ホタルとメダカが共に生息する松子地区の環境と活動の経緯

JR外房線沿線から東部に水田が広がる一宮町の中で、松子地区は、それよりほんの数百メートル内陸寄

りに入った場所にもかかわらず、山間で耕作に不便なため、休耕となっている水田が多い場所です。

ここにホタル・メダカが繁殖しているのは、地域全体としては農薬の使用量も少なく、生活廃水の影響も

少ないことが幸いしているはずです。

平成13年、町立東浪見小学校の生徒たちにより、休耕田を利用して町内のメダカを保護する活動がきっかけとなって、町民有志の皆さんにの協力のもと当会が発足しました。

2. 松子地区におけるメダカ、ホタルの生息状況

メダカの放流翌年からその数は急増しました。会の活動は、メダカだけでなく、かつて多く見られたホタルの生息環境を守ることも目的とし、水田脇の水路周辺の整備も実施して来ました。

現在、ゲンジボタル成虫の出現数は年によりその増減がかなりあります。これは、幼虫の生息場所である

水路の環境が年により著しく変化するためです。

また、ヘイケボタルに関しては、メダカの生息場所を確保するために始まった無農薬による稲作体験田

を継続するにつれて徐々にその数を増し、現在も微増の状況が続きます。

周辺の山裾には、クロマドボタルの幼虫も多数確認されております。

メダカの増加により、水田から水路へ、そして水路の下流の用水池である洞庭湖から農業用水路へと生息

域を拡大して来ているものとみられ、現在は町内の水田用水路周辺で相当数のメダカが生息していること

が確認されています。

3. 松子地区と周辺部を特徴付ける生き物たち

松子周辺では毎年2月頃にアカガエル類の産卵が多数あります。平成16年前後には5反ほどの水田・休耕田にニホンアカガエル・ヤマアカガエルの卵塊が百以上確認されました。近年はその数はそれほど多くありませんが幾分安定してきているようです。また、トウキョウサンショウウオの産卵もみられます。

植物では、ミクリが水路に生育していますが、土砂の堆積と共に水路の環境も部分的に変化してきている

ため、水田の一部などにも保護している状況です。

4. 一宮町におけるメダカの生息状況

数年前から、町内の水田の水路に広域にわたってメダカが生育しているのではないかとされていたため、

本年よりその状況を把握するために調査を開始しました。本年は一部地域について報告いたします。

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち			
題名 市川市大町自然観察園におけるヘイケボタルの保全と市民向け鑑賞会の実施			
報告者名	金子 謙一	連絡先	市川市大町284 自然博物館 所属団体 市立市川自然博物館
報告要旨			
市川市大町自然観察園では、ヘイケボタルの発生時期にあわせて2週間ほど、公園を延長営業し、野生のヘイケボタルの光を多くの市民の方に楽しんでもらっている。交通アクセスに対する対処などで動員数には違いがあるが、無料送迎バスを運行していた時期の週末には、最大で2千人が、全長1キロの谷津の公園に、時間幅1時間半足らずの間に集中した。オーバオユース気味ではあるが、野生のヘイケボタルをきちんとした施設管理のもとで市民に公開している公園として、市民向け鑑賞会は好評を得ている。 事例発表では、自然観察園のうち、以前はヘイケボタルが見られなかった区画が、あることを境にして発生するようになり、現在ではもっとも有力な観察ポイントとなっている経過を紹介する。 その区画は、谷津の谷底の一部で、以前はやや埋まっていたヨシとセイタカアワダチソウが混生し、フジやクズ、カナムグラ、ヤブガラシが茂る、夏の昼間に一見すると湿地とは思えない環境であった。その区画に対し、野鳥観察をおこなう同好会の方々がセイタカアワダチソウ抜きのボランティア作業を実施してくださるようになり、数年も経つとガマやカササゲが優勢となり、湿地環境が取り戻された。それと期を同じくして、以前は発生が見られなかったヘイケボタルが明らかに発生するようになり、また、セイタカアワダチソウ抜きの作業がヘイケボタル好みの湿地の維持に有効に機能し、現在では有力な発生区画が安定的に保全されるに至っている。			

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち																																																																															
題名 四街道市内のホタル調査と保全活動について																																																																															
報告者名 松川 裕		連絡先 y2501bird@aroma.ocn.ne.jp		所属団体 四街道自然同好会																																																																											
報告要旨																																																																															
○ 四街道市は東京から47km、JRの快速で東京駅から50分、勤め人の大半が東京周辺に通う、東京のベッドタウンです。人口は87千人とお隣の佐倉市の半分の小さな街ですが、1年ほど前に、住民投票で、この文化会館の建て直し計画を中止させるなど、マスコミの話題になった所でもあります。 ○ ここに私が所属する「四街道自然同好会」があります。加入世帯数は363世帯、市の世帯の約1%は自然同好会の会員というマンモス団体です。活動の主体は ① 年間34回の自然観察会 ② 小学校などでの総合的学習の支援（30人の指導員による自然観察授業）を、年間40回実施し県内では圧倒的な実績を誇る。 ③ ホタルの調査と保護活動 四街道市のホタルは全てヘイケボタルです。 ○ 四街道自然同好会ではH6年以来、14年間に渡りホタルの生息数のカウントを実施してきました。当初は調査地点や要員も少なく、十分な調査ができませんでしたが、現在 の体制になった、H15年以降の調査結果を分析してみました。 ○四街道市に於けるヘイケボタルの生息数（単位 匹数） <table border="1"> <thead> <tr> <th>エリア名</th> <th>H15</th> <th>H16</th> <th>H17</th> <th>H18</th> <th>H19</th> <th>H20</th> <th>H20－H15</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>物井</td> <td>144</td> <td>182</td> <td>29</td> <td>70</td> <td>191</td> <td>58</td> <td>－86</td> </tr> <tr> <td>栗山</td> <td>63</td> <td>56</td> <td>70</td> <td>52</td> <td>160</td> <td>124</td> <td>＋61</td> </tr> <tr> <td>旭ヶ丘</td> <td>229</td> <td>133</td> <td>135</td> <td>48</td> <td>148</td> <td>63</td> <td>－166</td> </tr> <tr> <td>みそら南</td> <td>247</td> <td>228</td> <td>171</td> <td>323</td> <td>342</td> <td>308</td> <td>＋61</td> </tr> <tr> <td>旭中北</td> <td>163</td> <td>396</td> <td>161</td> <td>248</td> <td>472</td> <td>588</td> <td>＋425</td> </tr> <tr> <td>成山</td> <td>30</td> <td>256</td> <td>169</td> <td>160</td> <td>437</td> <td>613</td> <td>＋583</td> </tr> <tr> <td>吉岡</td> <td>3</td> <td>9</td> <td>19</td> <td>29</td> <td>194</td> <td>154</td> <td>＋151</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>879</td> <td>1,260</td> <td>754</td> <td>930</td> <td>1,944</td> <td>1,908</td> <td>＋1,029</td> </tr> </tbody> </table> 注 ①出現数は天候に大きく左右される②出現時間のピークが、20：00～20：30と短いので、ピーク時間に必ずしもカウントできない③ホタルのカウントは、相手が飛ぶものでかつ夜間に行われるので、非常に難しい等の条件があるので、数値は傾向値として認識頂きたい。 ○ H15年以降の調査では、H17年の754匹をボトムに生息数は増加傾向です。特に、ここ1～2年は1,900匹台と調査開始以来最高水準です。								エリア名	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H20－H15	物井	144	182	29	70	191	58	－86	栗山	63	56	70	52	160	124	＋61	旭ヶ丘	229	133	135	48	148	63	－166	みそら南	247	228	171	323	342	308	＋61	旭中北	163	396	161	248	472	588	＋425	成山	30	256	169	160	437	613	＋583	吉岡	3	9	19	29	194	154	＋151	合計	879	1,260	754	930	1,944	1,908	＋1,029
エリア名	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H20－H15																																																																								
物井	144	182	29	70	191	58	－86																																																																								
栗山	63	56	70	52	160	124	＋61																																																																								
旭ヶ丘	229	133	135	48	148	63	－166																																																																								
みそら南	247	228	171	323	342	308	＋61																																																																								
旭中北	163	396	161	248	472	588	＋425																																																																								
成山	30	256	169	160	437	613	＋583																																																																								
吉岡	3	9	19	29	194	154	＋151																																																																								
合計	879	1,260	754	930	1,944	1,908	＋1,029																																																																								

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち			
題名		環境美化のために各地で放流されているゲンジボタルと地域性の問題	
報告者名	笹木智者子	連絡先	0770-23-5003 所属団体 緑と水の会
報告要旨			
私がフィールドとしている敦賀市の中池見湿地はメダカ（北日本型）、トンボ（70 種）、ホタル（中部型）など里山に生息する多様な生き物たちが、当たり前のように、そして、当然という姿でしたたかに生活しています。 環境省生物多様性センターが実施する「モニタリングサイト 1000」里地分野のコアサイトになっています。調査 8 項目の中でゲンジボタル（中部型）、ヘイケボタル、クロマドボタルの調査も 6 月、7 月と実施しています。 イノシシに崩された小川の環境整備のため草刈りや小川の泥上げなどを 3 年前から実施したところ、今年はヘイケボタルが 20 年前のように大量に乱舞する姿が見られました。少しの生息環境を戻しただけのことです。人間が行うことはそれだけです。後はホタルにおまかせです。しかし、近くの農業用水路のコンクリートによる 3 面張りの川にはホタルは戻ってきません。日本の農業政策は税金を使って、「自然に優しくない方法」を推進しているようです。そして、ホタルが少なくなると、好意でホタルを離れた地域へ持って行き幼虫を放したり、ホタルを養殖し、各地へ販売出荷している業者もいます。「販売の自由」か「生息環境の攪乱」かはメダカに関しても同様な問題です。 最近、新聞紙上でホタルに関する記事を目にしました。 日本のホタルは地域により関東型は 4 秒、中部型は 3 秒、近畿型 2 秒と分かれています。その中でも地域性があり遺伝子にも違いがあるとのこと。イベントを行うときもホタルもメダカも地域性を大事にする運動をすすめるべきと考えます。 外来種問題について、ホタルの養殖に使うために、海外からカワニナが輸入されていると耳にしたが、どのようなものなのか、もし知っている人がいたら教えてほしい。 福井県敦賀市東洋町 6-37			

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生物たち
題名 学校ビオトープを活用した地域の自然再生
報告者名 野口理佐子 連絡先 risako@bio-inste.com
所属団体 人と自然の研究所 麻布大学非常勤講師
報告要旨 1. ビオトープとは何か 数年前、学校ビオトープがもてはやされ、全国の小中学校にビオトープが造成されました。しかし、造成されたビオトープは、ポンプなどの設備が整った池型タイプの物が多く、「ビオトープ＝人工の池」というイメージが定着してしまいました。本来のビオトープとは、「バイオ＝生物」「トープ＝場所」つまり「生物の生息、生育場所」という意味です。さまざまな種がそこで生息・生育できる場所のことを意味します。森や林はもちろん、田んぼや小川、民家のお庭など、そこにさまざまな種が暮らしていれば、その場所は大切なビオトープと言えます。 メダカやホタルの視点でみるとそれらが生息できるビオトープ＝水辺環境が圧倒的に失われてしまいました。 2. 学校ビオトープが荒廃する理由 数多くできた学校ビオトープの中には、その後の管理ができず、放置され荒廃してしまい返って迷惑施設になってしまうというケースも少なくありません。造成はしたものの運用の仕方や管理の仕方がわからないと言った声も多く聞かれます。それは、多くの場合、「ビオトープを造る」ことが目的となってしまう、何故ビオトープを造るのか、なんのために造るのかという「ビオトープのコンセプトがない」ことが大きな要因になっています。 例えばビオトープを地域の自然を再生するための1つのツールもしくは手段と考えると、そのコンセプトに応じたビオトープの形や大きさを考え、生きものが自然に来てくれるように環境を整えます。そして、そこにどんな生きものが来てくれたかが、重要なビオトープの評価になります。また来てくれ生きものの移動能力から推測して周辺の自然環境の様子を知ることができます。 ビオトープをつくることから、子どもたちと一緒に考え作業を行い、生きものの観察を通じて、ビオトープの管理の仕方も生きものから教えてもらいます。子どもたちが主体的に関わることで、ビオトープが授業で活用されることももちろん、子どもたちと地域の自然再生の一躍を担うことにつながります。 3. 世田谷の学校ビオトープの事例 世田谷区教育委員会からの委託をうけて、2006年度より延べ8校のビオトープ再生ワークショップに取り組んでいます。そもそも学校は、子どもたちが徒歩で通える範囲にその地域の中に均等に配置されているので、各学校が共通のコンセプトで取り組むと、生きものの移動能力と学校の位置関係から、効果的なビオトープネットワークを構築することができます。世田谷では、失われた浅瀬の水辺空間を創出し、多摩川水系のメダカや水生植物を導入し、都心に近い学校でも14種のトンボ類を確認することができました。生きものの気持ちになってビオトープを創出すると、生きものは必ず応えてくれます。子どもたちとそのことを実感することが、未来への希望につながっています。

特別分科会 ホタルと水辺環境・水辺の生きものたち																																			
題名 八千代のホタル事情																																			
報告者名 加藤賢三	連絡先 kato-ken@jcom.home.home.ne.jp 所属団体 八千代ホタルフォーラム																																		
報告要旨																																			
1. 八千代のホタルフォーラムの活動とホタル調査 自生のホタルを21世紀に残したいと考え平成3年に八千代ホタルフォーラムを設立。主な活動は谷津を中心とした自然観察や学習会・講演会、夏にはホタルをみる会。これからの目標は、昔だったらごくあたりまえの里山や谷津の原風景を何とか残したいと願い、体験することを通じて、自然から学ぶこと。 (1) 石神谷津自然観察会／年間3回 (2) 八千代のホタルを見る会／毎年7月末～8月初め (3) ホタルマップの作成 (4) ホタルの生息調査報告書作成 (5) 体験農業／1. 米作り／炭焼き 6) 花輪川プロジェクト／ホタルやメダカの自生をめざして (7) 休耕田の有効利用／トンボ、カエル、ホタルの保全 (8) 八千代環境フォーラムの開催（平成6年～平成12年） ●八千代のホタル生息調査報告（平成5年～平成13年） 八千代環境フォーラム設立 市内外の環境ボランティアグループが集い、交流を図りながらできるだけ多くの個人あるいはグループと話し合いの場を作りたいと願って八千代環境フォーラムを設立 <table border="0"> <tr> <td>平成6年</td> <td>第一回</td> <td>里山の生き物たち 水のリサイクル</td> <td>ケビン・ショート 堺 好雄</td> </tr> <tr> <td>平成7年</td> <td>第二回</td> <td>人もホタルも輝く街に</td> <td>富野暉一郎</td> </tr> <tr> <td>平成9年</td> <td>第三回</td> <td>右手にスコップ、左手に缶ビール</td> <td>渡辺豊博</td> </tr> <tr> <td>平成12年</td> <td>第四回</td> <td>八千代に千年の森を作ろう パートナーシップでまちづくり</td> <td>鶴見武道 小坂雄二</td> </tr> </table> 2. 市民活動の広がり 八千代市ほたるの里づくり実行委員会の設立 <table border="0"> <tr> <td>平成10年</td> <td>7月</td> <td>八千代市ほたるの里づくり実行委員会の設立</td> </tr> <tr> <td>平成14年</td> <td>3月</td> <td>八千代市ほたるの里づくり案内冊子作成</td> </tr> <tr> <td></td> <td>10月</td> <td>『ホタルサミットin八千代』開催</td> </tr> <tr> <td>平成15年</td> <td>4月</td> <td>会報『ほたるの里だより』創刊号発行</td> </tr> <tr> <td>平成16年</td> <td>10月</td> <td>『ちばほたるマップ2004』完成</td> </tr> <tr> <td>平成17年</td> <td>10月～11月</td> <td>『ほたるの里写真展』開催</td> </tr> </table> 3. 今後の課題 八千代市のホタルは激減しているが、その原因は以下のような三つの要因が考えられる。 1) 都市化による自然環境の悪化、2) 農地改良工事による生息地の変化、3) 水田耕作放棄による生息環境の変化など。		平成6年	第一回	里山の生き物たち 水のリサイクル	ケビン・ショート 堺 好雄	平成7年	第二回	人もホタルも輝く街に	富野暉一郎	平成9年	第三回	右手にスコップ、左手に缶ビール	渡辺豊博	平成12年	第四回	八千代に千年の森を作ろう パートナーシップでまちづくり	鶴見武道 小坂雄二	平成10年	7月	八千代市ほたるの里づくり実行委員会の設立	平成14年	3月	八千代市ほたるの里づくり案内冊子作成		10月	『ホタルサミットin八千代』開催	平成15年	4月	会報『ほたるの里だより』創刊号発行	平成16年	10月	『ちばほたるマップ2004』完成	平成17年	10月～11月	『ほたるの里写真展』開催
平成6年	第一回	里山の生き物たち 水のリサイクル	ケビン・ショート 堺 好雄																																
平成7年	第二回	人もホタルも輝く街に	富野暉一郎																																
平成9年	第三回	右手にスコップ、左手に缶ビール	渡辺豊博																																
平成12年	第四回	八千代に千年の森を作ろう パートナーシップでまちづくり	鶴見武道 小坂雄二																																
平成10年	7月	八千代市ほたるの里づくり実行委員会の設立																																	
平成14年	3月	八千代市ほたるの里づくり案内冊子作成																																	
	10月	『ホタルサミットin八千代』開催																																	
平成15年	4月	会報『ほたるの里だより』創刊号発行																																	
平成16年	10月	『ちばほたるマップ2004』完成																																	
平成17年	10月～11月	『ほたるの里写真展』開催																																	

展示部門と子ども広場

作品展示

こどもしぜん絵画展（市内小学校、県立千葉盲学校）、割り箸アート、孔版画・ガリ版アート、押し花アート、四街道の鳥たち（写真）



パネル展示団体

総合公園植生調査の会 四街道自然同好会 四街道プレパーク“どんぐりの森” NPO法人ちば環境情報センター 四街道食と緑の会 四街道地域子ども教室“まじやりんこ” 四街道こどもネットワーク NPO法人四街道メダカの会 四街道をきれいにする会 谷当グリーンクラブ・「わたしの田舎」谷当工房 NPO法人竹研究会 千葉の里山・森づくりプロジェクト推進会議事務局 NPO法人千葉自然学校 ふるさと産品・ふるさと料理 四街道市環境政策課「不法投棄監視」 四街道市役所「ストップ温暖化」 トラスト田んぼ ライオンズクラブ 残土ネット 地産地消の会“朝市” 船橋メダカの学校 藤沢メダカの学校をつくる会 メダカの学校かごしま 桜ノ宮自然公園

しぜんあそびの広場参加団体

四街道自然同好会（どんぐり細工 拓花・拓葉） 千葉県自然観察指導員協議会（草花あそび・草バッタ） 草笛の会（草笛） ちば市ネイチャーゲームの会（ネイチャー体験） 子どもと自然学会（自由研究相談コーナー）

交流会

第1日目、分科会終了後、四街道市文化センター3Fにて交流会を開催しました。

参加者数53名、オープニングセレモニーにロイヤルバンド・プルメリアによるハワイアンが演奏され、歓迎ムードを高めてくれました。メダカが取り持つ縁がこんなに広がりを持つことが各地から参加された方々のたのしいエピソードにより語られました。

そして何よりも四街道蕎麦の会が何日も前から入念に仕込んだ地元産の蕎麦が提供され皆様の感激は一層高まりました。再会を約して万歳三唱、閉会しました。



蕎麦打ち



乾杯

《自然環境観察およびホテル鑑賞会》

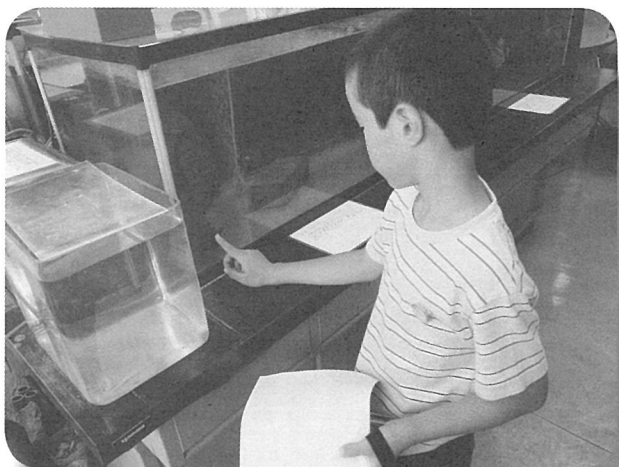
平成21年8月8日

自然観察バスツアーは、8月9日、A、B、Cのコースに延べ166名が参加し、千葉県内の自然環境を視察、研修を行いました。

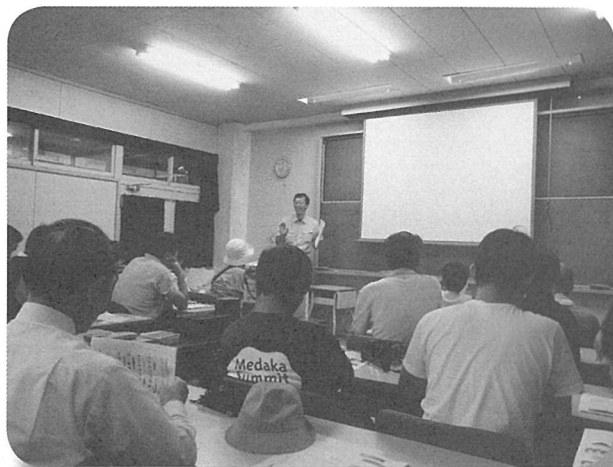
Aコースは印旛沼と四街道市内の自然環境保全活動拠点のひとつとなっている「ムクロジの里」を見学しました。印旛沼では、県内水面産研究所を見学、川津上席研究員より印旛沼に生息する魚介類について説明を受めました。印旛沼の水浄化活動に取り組んでいる「印旛沼野菜いかだの会」並びに「印旛沼広域環境研究会」の説明により印旛沼の自然環境について学習しました。



空芯菜の水耕栽培による水の浄化



県内水面水産研究所展示室



県内水面水産研究所

Bコースは県中央博物館の見学を行い、開催中の生物多様性保全企画展を見学、副館長の解説により生物多様性について学習しました。そのあとAコースと同じく「ムクロジの里」を見学しました。



ムクロジの里



中央博物館

Cコースの「いすみ環境と文化さと」では天然記念物「ミヤコタナゴ」を保全のため人工繁殖を試みているネイチャーセンターを訪れ、その後、鴨川の「大山千枚田」を里山風景を楽しみました。



大山千枚田



大山千枚田

ホタル観賞会は大会の前8月3，7日および大会当日に行いました。四街道市内にはホタルが生息する場所は数箇所ありますが、ホタルが最も多く見られ、また、地元の「みそらホタル愛好会」が保全活動を行っている四街道市立旭中学校下の谷津において観賞会をおこないました。

「みそらホタル愛好会」の日ごろの活動のおかげと親切な案内により沢山のヘイケホタルを見ることができました。ホタルを見たいというだけでこのサミットに遠路はるばる参加された方もおりました。見事なホタルの乱舞に感激する言葉が多く寄せられました。

《感想文》

「めだかサミット in よつかいどう」に 参加して

(1) 池田 泰子、上村久美子

(メダカの学校かごしま)

朝5時起きで鹿児島空港を飛び立ち、豊かな自然に囲まれた会場に到着したのは開会の1時間前でした。大急ぎでパネル展示を始めた私たちに最初に声を掛けてくださったのは、大会副会長の楠岡さんでした。とはいってもお名前は後で知ることとなるのですが。お元気な声で「鹿児島からですか、ありがとうございます。鹿児島、なつかしいなあ」と暖かく迎えてくださった楠岡さんに、長旅に疲れた私たちは元気を取り戻しました。

笑いあり、涙ありのC. W. ニコルさんの講演、また、このサミットに携わる全ての市民グループの皆さんが、未来を担う子どもたちのために何ができるか、なにをしなければならぬか・・・ということを常に考えて活動していってほしいことに心を打たれました。

始めから終わりまで、皆様の温かい心に励まされ、2011年全国大会開催に向け沢山の力を頂いた二日間となりました。本会もいよいよ9月17日にはNPO認証式を迎えます。四街道でお会いした皆さんと、また鹿児島で目にかかれることを楽しみにしています。ありがとうございました。

(2) 本田 信美

(和泉めだかネットワーク 事務局)

四街道大会への出席は、私にとって5回目

の「全国めだかシンポジウム」への参加でありましたが、大きな感銘を受けた内容でありました。全国自治体の先端を切って、生物多様性保全ちば県戦略が策定され、それを受けて四街道市でも実践を進められておられることには驚くと同時に羨ましくもありました。

私たちが住んでいる地域にも、魚類・植物・昆虫・野鳥などの稀少生物が多く生息していますが、開発などが計画され生物多様性の危機を増大させています。記念講演にもありましたが、先ず自分たちが出来る範囲で行動を起こすことが大切であることを学びました。

四街道メダカの会のみなさまの積極的な活動も大変勉強になりました。大変意義のある大会を開催いただきまして、遠路駆けつけた甲斐がありました。最後になりましたが、交流会で参加者全員にふるまわれた手打ちソバ、美味しかったです。本当にありがとうございました。

(3) 菊池 久登

(藤沢メダカの学校をつくる会)

第11回全国メダカシンポジウムよつかいどう大会の成功をおめでとうございました。また、2日間にわたる実践発表や研究発表、ニコル氏の講演会、現地視察会など盛りだくさんの内容で、たくさんのことを学ばせていただきましてことに感謝いたします。今回の大会にすべてにわたり、実行委員の方々の精力的な活動と熱意、小池市長様をはじめ

とするたくさんの方々の情熱に、勇気を与えていただきました。

都心からわずかの距離にありながら、人と共生している自然とその保全に努めるボランティアの人々の活動は、藤沢における活動にも大変参考になりました。また、幅広いネットワークは、市民や県民にも環境に対する意識を高めているものと思います。汚れていると言われる印旛沼に、藤沢ではほとんど見ることができないチョウトンボが軽快に飛んでいました。それは、きれいになっていく湖の未来を見るようでした。地道な活動がきっと素晴らしい環境をつないでくれるものと思います。

(4) 中上 章夫

(藤沢メダカの学校をつくる会)

C. W. ニコル氏の記念講演「人と自然との共生」面白く語られた。第三分科会「子どもの育ちと自然」に参加し話を聞きながら、千葉の祖父の家に行ったことを思い出した。香取郡の山の中で盆地に田んぼがあった。私のような都会（東京の新宿）育ちで、服を汚しては叱られ、身体も弱かった所為で、千葉の子どもたちとも一緒に遊ばず、祖母に連れられ里山を散歩するか、伯母の田植え、稲刈りなどの農作業を見ていただけである。

分科会で話された「里山の子どもたち」では心情的な育ち、人間性の育ちに自然の必要性が話されていた。同感である。木更津社会館保育園の子どもたちの泥んこになり、木登り、メダカ、ザリガニ取りに熱中する姿に幸せを感じた。

「いすみ環境と文化のさと・大山千枚田」の自然観察ツアーでは、トンボの沼、ホテルの里などなどに自然が沢山あった。大山千枚

田の見事な棚田を守る活動は市民オーナー制度により、田植えから稲刈りまで体験してもらい、棚田の風景を守っているとのことである。自然保護活動の実際を見学することができた良いツアーであった。

めだかサミットinよつかいどう

～感激・感動・感謝～

・三感王に乾杯・

(5) 渡部かほり

(藤沢メダカの学校をつくる会)

江ノ島の灯台と秋空に富士山の美しい神奈川県よりお礼を申し上げます。

あのムクロジの里は実りの秋を迎えたことでしょう。温かいおもてなしの心と笑顔あふれるすばらしい大会に参加させていただきありがとうございました。

ニコルさんの講演は、日本人以上に日本を愛し、自然保護はできることを信じて、愛情を持ち、人を信頼し、夢を実現する希望を持ち続けることの大切さのメッセージと受け取りました。心底感激しました。

四街道の皆様が市長様、実行委員長様と一丸となり、パワフルな大会運営ときめ細かな体験ツアーを企画され、中央博物館見学はもとより、暗闇に輝くホテルの田園や水辺で思い切り遊べるムクロジの里など、豊かな自然を保護・保全・創生されていることに感動しました。

一ヶ月以上も過ぎた今、昨日のようにメダカの生息する美しい自然の原風景が臉に浮かびます。皆様の多大なご尽力でそれが存在し続けていることに憧れと驚異の念を覚えます。

生物多様性があって人間は命を頂いているとご挨拶された日本めだかトラスト協会長岩松鷹司様より「藤沢メダカの学校を作る会」

は環境功労賞が授与されました。このような栄誉に浴し唯々恐縮、感謝しております。明日からの活動エネルギーを頂戴した大会でした。

（6）岩井 光子

（名古屋市 日本めだかトラスト協会員）

「全国めだかシンポジウム四街道大会」に主人と参加しました。昨年5月の山形県天童市のシンポジウムにも参加しましたが、めだかを愛し、ホテルを愛し、自然を愛している人たちは、皆こころ優しき人ばかりです。めだかを通して心温まる交流が出来ることを、毎回楽しみにしています。

C. W. ニコルさんの講演では私財を投じて「アフエンの森財団」を設立したとの話に感銘を受けました。日本人より日本を愛しているように感じます。自然破壊が進み、里山がなくなり、生態系が崩れていくばかりの環境を何とか心ある人たちで食い止めなければいけないと感じました。

四街道大会は、初日のホテル鑑賞会、二日目にメダカやホテルの生息地観察や千枚田の見学などもあり、とても良い企画でした。四街道市は「自然環境を生かすまちづくり」に取り組んでおられるようで、全国でもこのような市町村が増えていくことを願わずにはいられません。

私もメダカを飼い始めて8年になります。今では庭に睡蓮鉢は17個も並んでいます。このメダカたちが本来いるはずの川や池や田んぼに群れ泳ぐ日本の原風景を、早く取り戻したいと心から願っています。

「地図を頼りに ムクロジの里へ行った友人のこと」

大塚理枝子

（NPO法人四街道メダカの会）

千葉の詩人A子さんは、「大体あのような会には女性が大半なのに、お父さんが大勢来ていたのには驚いた。四街道市の皆さんが、自分達の町を大事に思っているのね」と話していた。彼女は現地へも行きたいからと、辻間さんに丁寧に書いてもらった地図を頼りにムクロジの里へ独りで行き、しばしあの里山の雰囲気浸っていたそうだ。N子さんとは10年ぶりの再会を喜んだ。彼女は数年前からつくば市に在住している。動物好きなのでこの大会に誘ったら、遠路車を走らせてご主人と一緒に来てくれたのだった。後日「8日は講演会の後、展示パネルの説明を聞いたり、めだか池の中のメダカさんも見たり（メダカ池もその辺で買ってきたようなものではなく、周りに本物の草が生えていて、びっくり）、兎に角あの会場には元気が漲っていて感動した」と電話してくれた。また、「入場券は10,000円でもいいくらい良い講演だった」と云った知人もいる。一方、「あの時、メダカを見られなくて残念だったわ」との声も聞こえた。

「メダカの研究最前線」の分科会にタイムキーパー役を務めた。宇都宮大学の松田先生の発表はかなり専門的だったが面白く、今後の研究の発展を期待したい。南山大学の川角さんの大学生を対象にしたアンケート調査によると、メダカを水族館で見たと答えた学生が多かったという報告に、自然に接しない若者が多くなっているのでは、また、自然の中でメダカが減っている証ではと大変気になっ

た。

交流会では、山形県の船山先生から、「学校のめだか池のメダカを見て先生方もなごんでいる」とビールのコップ片手に笑顔で話されたのに相槌した。

実行委員の一人としての反省点は多々あるが、多くの人たちに喜んでいただけたこの大会の運営に拘われたことは、75歳の私にとって貴重な経験となった。みんなが元気に生きられるように、メダカを気かけよう。そして多様な生き物が育まれる身近な自然を大事にしようと改めて思っている。

「心に残る言葉」

(1) 安田 睦子

(船橋市・日本めだかトラスト協会員)

記念講演のC. W. ニコル氏の話しに、久しぶりに骨のある言葉を耳にしました。日本に移住し、国籍を取り「日本が大好きだから日本で得た収入で荒れた森を再生して日本に還元している。」との内容に思わず「天晴れ！これぞ本物の日本人」。外国から見た目だからこその行動だと思いました。自然体で率直な語り口、裏づけのある話に感動させる言葉の不思議さ……。ニコル氏の跡を継ぐべき森や生態系を知り尽くした人材が続くことを願っています。物いえぬ生物の代弁者、生き物の側から見た発想など、自然との共生の道を歩む人が増えるようまた、これを機に県内はじめ全国の自然環境が豊になるような活動の盛り上がりを期待しています。

実行委員として、皆様とともに四街道市から全国へ向けて情報を発信し、大成功裏に大会が終えたことは、私にとって貴重な体験となりうれしく思っています。2009年8月は、

新しい人との出会いと沢山の笑顔の忘れられない年となりました。実行委員会の皆様はそれぞれの活動の場に戻られたことと存じます。この経験を語り継ぎ生かして行きたいと思えます。

(2) 高橋 朋之&父

(NPO法人四街道メダカの会)

C.W.ニコルさんと握手ができてうれしかったです。講演の中で一番心に残ったのは「男の子にはとび道具」です。

ニコルさんの「自分たちのできることをやっといこう」「楽しそうにやっといれば自ずから仲間は集まる」といったお話が、メダカの会のみなさんの姿と重なって、心に残りました。

自然観察ツアーでは前から行きたかった「内水面水産研究所」に行けてとても楽しかったです。(朋之)

分科会「メダカ研究最前線」では宇都宮大の松田先生のお話がすごく興味深かったです。(父)

「めだかを愛する仲間にもまれて」

舟山 義広

(山形県 中山中学校教諭)

今年はじめて学校の中庭でめだかを飼い始めた中学教師です。全国で精力的に活動されている皆様のエネルギーを分けていただきたく、山形から参加いたしました。当日の分科会は「めだか研究最前線」に参加しましたが、どの発表も一番大切な「熱意」を感じました。めだかの未来に光明を見る思いでした。

講演から分科会までの内容もさることながら、一番印象に残っているのがスタッフの温

かなもてなしです。受付のみなさんの笑顔と、懇親会できめ細やかに動いていた係の方に感謝いたします。（購入してきたTシャツとバンダナは、かわいいと評判です。）また、全国から集まった、めだかを愛する先輩方。初心者の疑問に丁寧に答えていただき、ありがとうございました。

めだかをとり巻く環境は、自然の多いはずの山形でも徐々に悪化しています。現存している生息地を守るだけでなく、空白区を埋めていく活動もますます重要になるでしょう。全国の仲間と連携しながら多少なりともめだか復活に貢献できればと思います。

「みそらのヘイケボタル」

今村 高良（北九州市）

もともと田んぼには無数の生きものが育つ環境がありました。メダカとヘイケボタルも田んぼにつきものでした。何時の頃からか圃場整備なるものが進められ、用水路はコンクリート化され、田んぼは乾田化、メダカやヘイケボタルが消えました。

北九州でも10年前までヘイケボタルの大発生地が2箇所ありました。それも圃場整備などで土まで入れ替えられて完全に消えてしまいました。

北九州市内全域の河川にはゲンジボタルが復活して、シーズンになると、いたるところでボタル観賞が可能になりましたが、ヘイケボタルは各所に数十匹ずつ確認されるに過ぎません。全国的にもヘイケボタルは危機的な状況です。北九州でもヘイケボタルの復元に向けての活動が進められているところです。

みそらのヘイケボタルを観賞しましたが、道路沿いの湧水により出現した湿地にまと

まって飛ぶヘイケボタルを見てホッとしました。ここも安定した生息環境では無い様です。荒れた休耕田のセイタカアワダチソウや、群生するヨシを刈り取って環境を守っているとのこと、大変なご苦労です。大変でしょうが、この人里の可憐な昆虫ヘイケボタルやメダカを守るため、ご活躍されんことをお祈り致します。

「四街道のメダカ&ホタルよ 永久に栄あれ」

笹木智恵子

（敦賀ナチュラリスト 緑と水の会）

めだかサミットに参加するために、8月8日、真夏の暑い日に四街道の街に初めて来ました。駅の前大きな銀杏の大木、かつての街道を感じさせる堂々とした風格の黒松の並木。「この木たちも道路拡張で切られ少なくなっている。」と案内をして下さった人が残念そうに話していました。また、「会場は市民たちが住民投票で残した建物です。」と小さく環境に左右されやすい、ホタルやメダカをも大切に考える市民たちだからこそ都市化が進なかでも生き延びることができたのかもしれません。夜空にキラキラ乱舞するヘイケボタルも来年に向け、湧き水を探し、田起こしすることで銀の砂のように増えることでしょう。そして水生植物やメダカにも天国になるのではと、中池見湿地の保全を経験に想像していました。予想外のプレゼントもあり、田んぼや湿地は不思議がいっぱいの場所です。大会を運営された皆さま、これからのご活躍楽しみにしています。ありがとうございました。

「終わりよければ全てよし」 めだかサミットを成功裡に終えて

和田 孝男（四街道自然同好会）

将に格言の通り、成功に終わった“めだかサミットinよつかいどう”でした。

二日目のバス観察会 Bコースに同乗しましたが、県外からおいでの参加者から「昨日、今日と素晴らしい大会でした」と若干の世辞はあるのですが、褒められ昨年からの準備を進めてきた一員としては、苦勞（ほとんど役には立っていないのですが・・・）が報われた思いでいっぱいでした。

思い起こせば、第2回目の実行委員会から

参加して、参加者は少ないし、議論はなかなか前に進まないし、組織や体制は覚束ないし、大丈夫なのかなとも思いました。

ビジネスで、イベントを担当した経験から「組織・体制」「工程表」「人員配置」「調達」「経費予算作成」「実行」「確認」と進んでいくのが手順ですが、それがなかなか目に見えてこなくて心配でしたが、今やそれも過ぎ去った取り越し苦勞でした。最後には実行委員会に多くの方が出てこられ、それぞれご自分のやることを見つけられ、実行されました。うーんこれが市民パワーかと実感しました。



石川元三氏「四街道の自然」スライド



「四街道の自然」スライドより

《組織並びに後援、協賛、助成、 協力団体および実行委員一覧》

（主 催）

めだかサミット in よつかいどう実行委員会
日本めだかトラスト協会

（組 織）

大会会長 小池 正孝（四街道市長）
副会長 楠岡 巖（千葉県ユネスコ連絡協議会顧問）

（後 援）

千葉県・四街道市教育委員会・四街道市社会福祉協議会・朝日新聞社

（協 賛）

- ・花王株式会社・花王ハートポケット倶楽部・東京電力千葉支社
- ・アサヒビール株式会社東関東総括本部・アサヒビールワンビールクラブ
- ・千葉ガス株式会社佐倉支社・J A いんば・四街道市商工会
- ・四街道ユーアイ・ライオンズクラブ・四街道ライオンズクラブ
- ・四街道食と緑の会・ピクシーフォレスト・四街道市自然同好会
- ・よつばめーる（四街道市民ネットワーク）・ワークマン四街道店
- ・ちばグリーンバス株式会社・富士火災海上保険株式会社

（助成金交付団体）

- ・財団法人千葉県環境財団
- ・パルシステム千葉NPO助基金運営委員会

(協力団体)

- ・ NPO法人ネットワーク太地・たすけあいの会ふきのとう
- ・ まじゃりんこ・ロイヤルバンド・プルメリア・四街道子どもネットワーク
- ・ 四街道ユーアイ・ライオンズクラブ・移送グループ（手登根敏夫）
- ・ 北中地区給食サービスボランティア・わろうべの里づくりの会
- ・ おはようふれあい活動推進チーム・四街道少年少女合唱団
- ・ 四街道視覚障害者の会・おもちゃ図書館・NPO法人竹研究会
- ・ 総合公園の植生調査の会・ふるさと四街道の歴史学習会・蕎麦の会
- ・ 千葉県自然観察指導員協議会・ちば市ネイチャーゲームの会
- ・ 子どもと自然学会・NPO法人印旛沼野菜いかだの会
- ・ 県中央博物会・県内水面水産研究所・印旛沼広域環境研究会
- ・ みそらホテル愛好会・NPO法人大山千枚田保存会・ムクロジ会

めだかサミット in よつかいどう実行委員会

- 委員長** 任海 正衛（NPO法人四街道メダカの会）
- 副委員長** 荒尾 繁志（NPO法人四街道メダカの会）
松川 裕（四街道自然同好会）
小沢 武（四街道自然同好会）
晝間 初枝（千葉県自然環境指導員協議会）
- 事務局長** 原田 功（NPO法人四街道メダカの会）

(めだかサミット in よつかいどう実行委員) 実行委員会出席者

(順不同 敬称省略)

大井 武子、吉田 知、松川 裕、晝間 初江、荒尾 繁志、大塚理枝子、中村まゆこ、
小沢 武、小川 義雄、益満 董人、百瀬 久雄、高井 昭夫、本城 勝、原田 功、
鶴田 輝之、辻間 勇、大島 裕人、楠岡 巖、任海 正衛、松川 裕、晝間 初江、
荒尾 繁志、小沢 武、小川 義雄、益満 董人、江口 勝喜、和田 孝男、百瀬 久雄、
大谷 順子、菊池 徹、斉藤 耀一、森 千枝、古川 美之、行方 政枝、猿橋 芳生、
大見 政司、塚本 和枝、安田 睦子、真鍋 昌義、中村知津子、高橋 実、岡本 富子、
小澤玖仁子、西岡とし子、山崎 雄三、中島 祥治、徳澤 弘康、近藤めぐみ、加藤 賢三、
小坂 昌彦、石橋 誠、長谷川 敬、小林 弘伸、藤木 潤一、木村 華子

あ と が き

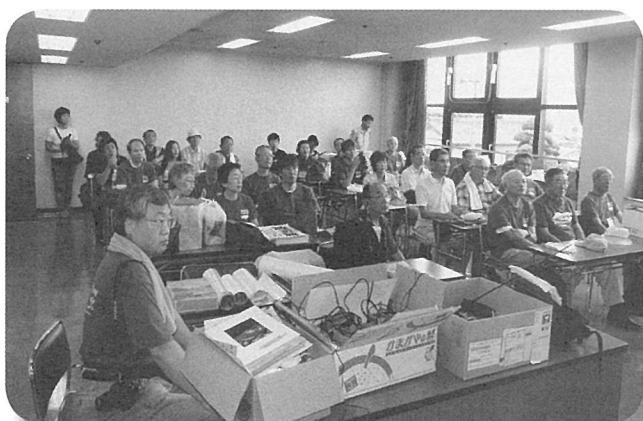
第11回全国めだかシンポジウム四街道大会（めだかサミットinよつかいどう）は、2009年8月8・9日四街道市文化センターを主会場に開催しました。

大会開催に際し、多くの団体、個人の方にご協力頂いたことに多大の感謝を申し上げます。報告書の発行、配布は、速やかに行うべく準備していましたが、事務局の都合によりこの時期になったこと、また、紙面の都合によりめだかシンポジウムの全容を余すことなく掲載することができなかったこととお詫び致します。

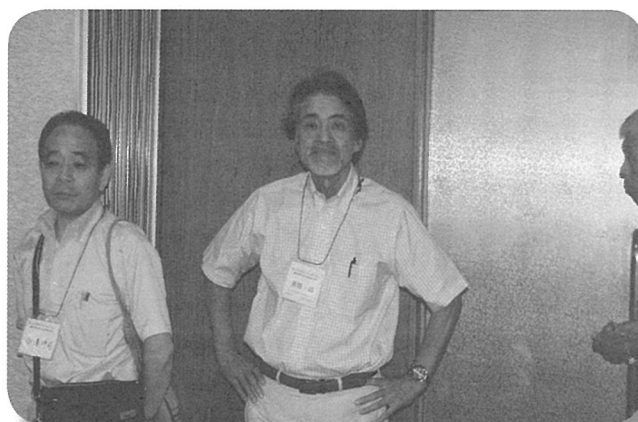
また、本大会の会長を務めていただきました四街道市長小池正孝氏は昨年9月脳梗塞に

より緊急入院する事態となりました。その後の療養の成果により日常生活には支障のない状態となったと聞いていますが、市長の職を続けることは困難と判断され職を辞しました。誠に残念なことであります。小池さんのメダカへの思い、生物多様性保全への願いを大切に受け止め、これからの活動に生かしていきたいと思っています。

最後になりましたが、次回、第12回全国めだかシンポジウムは鹿児島県で開催する予定と聞いています。これまでの全国大会の成果を踏まえ、全国めだかシンポジウム開催の成功をお祈りいたします。



朝の打合せ



原田実行委員長

第11回全国めだかシンポジウム四街道大会
報 告 書

平成22年 3 月31日発行

編集・発行 めだかサミットinよつかいどう実行委員会
印 刷 株式会社 弘 報 社 印 刷



よつかいどうのメダカ池 西岡とし子作



よつかいどうのメダカ池 西岡とし子作